

# 新米錬金術師の店舗経営01

お店を手に入れた！

いつきみずほ

---



ファンタジア文庫

2887

# Contents

Management of  
Novice Alchemist Get My Shop!

Prologue

Qfhflfiofff ..... 005  
プロローグ

Episode 1

Gfhffioffififio! ..... 009  
卒業できた!

Episode 2

My fhfih if... ..... 065  
私のお店は……

Episode 3

Eifhff fl fl, H flfhffio my fhfih! ..... 141  
まずは開店!

Episode 4

Tfl hffioffl ofhfidio fffioffl ..... 233  
風雲巻を巻ける

Epilogue

Afhflfiofff ..... 313  
エピローグ

Afterword

Affffioffioffio ..... 324  
あとがき

Special Short Story

Mffioffioffio fffioffioffio fl Lffioffio ..... 327  
【書きおろし特別ショート・ストーリー】ロレアちゃんの健康診断



口絵・本文イラスト  
ふーみ



Prologue

プロローグ

プロローグ



## 第一章

# Get My Shop!

お店を手に入れた！



# 01

Management of  
Novice Alchemist Get My Shop!



「……………」

目の前の光景に、私は言葉を失っていた。

朽ちた木製の柵。

草が生い茂っている庭。

今にも崩れてきそうな壁と曇ったガラス窓。

国有数のエリートであることを示す『鍊金術』の看板は、今にも屋根から落ちそうに傾いている。

「ここが、私の新天地……?」

幾度もの困難な試験をくぐり抜け、ついに掴んだ鍊金術師の国家資格。

師匠に勧められるまま店舗を手に入れ、期待に胸を膨らませて、王都から遠路はるばるやって来た。

その行程、およそ一ヶ月。

にも拘わらず——。

「……これは、あんまりだよ」

いや、さすがに少しおかしいとは思ったのだ。

いくら辺境の田舎町とはいえ、この家のお値段はわずか一万レア。

王都で部屋を借りれば、小さなワンルームでも二ヶ月分の家賃になるか、ならないか。

そんなお値段。

国から補助金も出ているので、実際の価格はもうちょっと高いはずだけど、それを踏まえたとしてもなお安い。

自分だけのお店。

そんな素敵なフレーズに、釣られてしまった部分が無いとは言えない。

言えないけど、それでも本当はこんな所に来る予定はなかったんだよ？

都会のお店で雇ってもらい、そこでしばらくの間修業して、お金を貯める。

それを元手に、適当な地方都市で、小さくても雰囲気の良いお店を開くはずだったのだ。

お金持ちになって贅沢をしたいとは思わない。

ただそれなりに稼げて、これまでお世話になった人たちに恩返しができるのであれば十分だった。

それなのになぜ私が、こんな辺境の町——いや、辺境の小さな村で、わずかな荷物のみを手にも、竹むことになったのか。



Episode 1

# Gfiffiufiftin!

卒業できた!

王立鍊金術師養成学校。

それはこの国で唯一、鍊金術師の国家資格が取得できる学校である。

この学校を卒業し、鍊金術師の資格さえ取得できれば、その人の人生はもう安泰。  
左うちわの生活が約束される。

だが、それだけに競争率も高く、入学はもちろん、無事に卒業を迎えることも非常に難しい。

そんな超難関校が王立鍊金術師養成学校なのだ。

そもそも鍊金術師とはエリートの名詞である。

生活に欠かせない各種鍊成薬や鍊成具を作れる能力を持つ上に、それらの供給は、需要に対して常に不足気味。

国家による価格統制もあり、過剰な値引きも認められていない。

故に利益率が非常に高く、作る商品さえ選べば売れ残りの心配が無い。

簡単に言えば、儲かる。

そのため、鍊金術師になれば一生食いつぶれがない——どころか、必死で働かなく

ても十分に稼ぐことができる。

また、王立鍊金術師養成学校の特徴として、努力すれば誰でも——平民はもちろん、孤児ですら入学できることが挙げられる。

入試に必要な知識は教本で学ぶことができ、それは申請すると無料で貸し出される。

その上、受験に費用は必要ない。

さすがに文字すら読めない場合はどうしようもないのだが、孤児院であっても望めば文字の勉強程度は可能なので、そこも個人の努力でカバーできる。

また、成績優秀者には学費免除のほか、奨学金の支給、試験ごとの報奨金授与があり、ある意味で、勉強さえしていれば良い環境が整えられている。

だがしかし、そんな恵まれた環境であるからこそ、その門戸は非常に狭い。

平民や孤児にとっては、ほぼ唯一の成り上がり可能な職業だけに入学希望者は多く、当然試験も難しい。

更に、優秀な家庭教師を付けた貴族も同様に受験するため、生中な努力では競争に打ち勝てるはずもない。

そして、何とか入学試験をくぐり抜けても安心はできない。

四ヶ月ごとに行われる試験。

その成績が一定水準に達しなければ、容赦なく退学処分を受けるのだ。当然、再試験なんてものはなく、これは貴族であつても同様。

結果的に五年後の卒業式に出席できるのは、入学時の一〇分の一以下と言われている。

そんな学校を私、サラサ・フィードは今日、卒業する。

いやー、大変だったね！

卒業の感慨？

そんな感じる暇も無かつたよ。

なんと言つても、昨日まで卒業試験があつたんだから。

そして、その試験結果の発表は、今朝。

万が一、それで不合格なら、今日学校に来て、卒業式には出られないという悪夢。

誰が考えたのか知らないけど、いくら何でもこの日程は無いと思う。

まあ、これまでの歴史で卒業試験に落ちた人は、さすがにいないらしいけど。

この試験に落ちるような成績の人は、それ以前に退学になつてからね。

よほど気を抜けば別だけど、卒業式の日に一人だけ教室に取り残されるといふ状況を想像すれば、普段の試験以上に気合いを入れるのは当たり前。

危険なのは病気ぐらい？ もちろんみんな解つているので、体調の維持には懸命になるし、不安があればしばらく前から学校を休んでも体調を整える。

もちろん私も、必死で頑張りましたとも！

その甲斐もあり、卒業証書と共に最後の試験報奨金もいただきました。

ええ、ありがたいことに。

思えば八歳の時に事故で両親を亡くし、孤児院に入れられてからは現実逃避するかのように、最低限の仕事以外はひたすら勉強。

そのため孤児院のみんなには迷惑を掛けたが、錬金術師養成学校を目指す子はみんなですべて応援するという暗黙の了解があるため、特に非難されることはなかった。

その代わりに上手く錬金術師になれたなら、お返しとして寄付金を送ることもまた暗黙の了解なんだけどね。

現に孤児院出身の錬金術師が定期的に寄付金を送ってきてくれているので、私たちも爪に火を灯すような生活はせずに済んでいたのだから。

そんなガリ勉の甲斐もあり、平民としてはかなり優秀な成績で入学に成功し、学費無料、奨学金の受給資格と入寮資格を得られ、一〇歳で孤児院を出ることができた。

それからはひたすらバイトと勉強に明け暮れた。幸いな事に、錬金術師のお店で採用されたため、店長に弟子入りもさせてもらえた。おかげでバイト自体が勉強にもなり、報奨金を貰えるまでの学力を身に付ける事もできた。

残念ながら、トップを取れた回数はごく僅かだったけど、幸いな事に、私より順位が上の人たちが、みんな貴族だったんだよな。

なぜ、幸い、かって？ それは報奨金に関する慣例？ 伝統？ そんなものがあつたら。

通常、試験報奨金は上位三名までに支給される。

これが厳密に適用されていれば、たぶん私が貰えた報奨金は今の半分ぐらいかな？

でも、貴族が上位に入った場合には、これを辞退するのが「貴族の義務」みたいな伝統があり、もし受け取ろうものなら『貴族なのに？』と後ろ指をさされかねない。

そして、そんな風に辞退された報奨金は、下位の順位に繰り下がって支給される。

私が大半の試験で報奨金を貰えたのは、この伝統のおかげ。

もちろん強制ではないけど、そこは貴族の誇りとか見栄があるらしい。

下級貴族の場合、下手すると裕福な平民よりもお金が無い事もあるので大変だとは思う。

私にはすつごくありがたい伝統だけだね。

そのおかげで、卒業した現時点で私の貯金は五〇〇万レアを超えていた。

普通の平民は一年に五〇万レアも稼げないので、実に年収の一〇倍以上！

うん、がんばった！ 私っ！

半分以上は奨学金と報奨金だけど、あとはバイトで稼いだお金だもの！

寮のおかげで宿泊費と食費が無料とはいえ、学校の授業や勉強の時間の合間を利用してこれだけ稼ぐのは、本当に、本当に大変だった。

ありがたい事に、師匠から貰っている私の日給は平民の丸一日の稼ぎに匹敵したけど、これは確実に破格。私が錬金術師見習いだからこそその金額である。

短時間しか働かない見習いのバイトでこれだけ稼げるんだから、本職の錬金術師が如何に稼げるか、という事だよな！

そして今日から私も、そんな錬金術師！

先ほど卒業式で貰った「錬金許可証」をポケットから取り出して眺める。

薄い金属のような、それでいて非常に軽く柔軟性がある不思議な物質。

そこに錬金術師のマークと私の名前、王立錬金術師養成学校の卒業証明が刻印されている。

更には私自身の魔力紋も記録されていて、私以外が触ると表示が消える仕組みまで仕込まれている。これ自体がある意味、錬金術の傑作とも言えるのだ。

むふふ、とついつい顔がにやけてしまいそうになるのを、頬に手を添えてこらえる。一人、門の前でにやけていたら不審だからね。

……一人。

そう、一人なんです。

卒業式も無事に終わり、新たな門出。

でも私は、学校の門の前でポツリと一人。

いやあ、この五年間、ホント、バイトと勉強以外しなかったからね！

おかげで、こうして学校から出ようとしているのに、挨拶に来てくれる人すらいない。

そして挨拶に行く相手もない。

周りでは後輩との別れを惜しむ卒業生や、迎えに来た人と笑顔で会話している人がいる

というのに、私の周りは空気がひと味違う。

誰も近寄ってこないんだから。

べ、別に、さ、寂しくはないけどねっ！

——いえ、本当は少し寂しいです。

私、友達がほほいかなかったからなあ。

自分が原因だから、仕方ないんだけど。

やつぱり、勉強ばかりしていて、ほとんど会話もしないんじゃ、友達はできないよね。

いや、まあ、実際のところ、ほほゼロだけで、本当にゼロではなかったよ？

去年までは、こんな私を気に掛けてくれて、仲良くなったくれた先輩が二人いたんだ。

そして、その先輩の繋がりで仲良くなった後輩が一人。

でも、去年無事に卒業したお二人は、今は別の町で働いているので、王都にはいない。

そして後輩の方とは言えば、運悪く数日前から体調を崩して卒業式には不参加。

『絶対、行きます！』とは言ってくれたけど、後輩の定期試験は卒業式のすぐ後。

万が一にでも不合格にさせるわけにはいかないので、『絶対に来ちゃダメ！』身体を治すように！

「うん、……早く行こう」

「うん、……早く行こう」

この空気の中、一人立っているのは少々辛い。

時々私に送られる訝しげな視線は、きつと気のせいじゃない。

私は一度振り返り、五年間を過ごした学舎を見上げる。いろいろな事があった。ほとんどは勉強の記憶しか無いけど、それでも楽しいこともあった。少なくとも勉強さえしていれば生活に困らないんだから、総じて悪くない学生生活だったんだと思う。

でも、これからは一人で歩いて行かないといけない。私は決意を胸に、校門に背を向けて歩き出した。



学校を出て最初に向かうのは、師匠のお店。

さんざんお世話になったのに、卒業して挨拶も無しという不義理はできないし、それが無くとも師匠には用事がある。

師匠のお店は学校からもほど近く、王都でもかなり良い場所にある。

おかげでバイトに通うのにも便利で、時間を有効に使えたのだ。

土地の値段とかはよく判らないけど、大通りに面しているし、たぶん一等地？

私がバイトしていた時も、ほとんどひっきりなしにお客さんが来ていたし。

「ししよー、こんにちはー」

私は軽く挨拶をして、いつものように店の奥へ入る。

卒業試験前に、すでにバイトは辞めているので、本当はマズいんだけど、ここの人たちとは五年近く一緒に働いて気心も知れている。

なので、特に止められる事もなく、笑顔で『卒業おめでとう』と奥へと通してくれた。

「おう、サラサ、卒業おめでとう」

店の奥、錬金工房で出迎えてくれたのは、超美人の女性。

その外見には似合わない、やや乱暴な話し方をする人。

外見年齢は二〇代半ば？

でも、五年前から変化は見られない気もする、実年齢不詳の錬金術師。

これが私の師匠である。

その腕前はトップレベル。

なんと、全国でも数えるほどしか存在しない上に、並みの貴族よりも影響力があると言われるマスタークラスの錬金術師なのだ。

しかも、他のマスタークラスの錬金術師がご老人なのに対し、師匠はこの外見。

私が年齢不詳と言いたくなるのも仕方ないよね？  
 だけどもあ、その外見のせいもあるって、王都でも非常に人気の錬金術師で、仕事の依頼は引きも切らない。

今もって、そんなお店で私が雇ってもらえたのが信じられないくらい。  
 詳しくは語らないけど、なんとというか……偶然と幸運の賜？

「ありがとうございます。師匠のおかげで、何とか卒業できました」

改めて丁寧に頭を下げたお礼を言うと、師匠は軽く手を振って応えた。

「謙遜するな。聞いているぞ？ 成績的にはほぼ首席だったらしいじゃないか」

「あれ？ そう、なんですか？」

試験報酬金はたくさんもらったけど、一位になったことは少なかつたよ……？

試験がある度に成績の上位一〇位までは貼り出されるため、順位自体は把握できている。報酬金を受け取れるかに関わるので毎回確認していたが、大抵は私の上に二、三人いた。名前はよく覚えていないけど、貴族だったことは確認している。

家名を見ればすぐに解るし、報酬金に関わるからね。

「貴族は、まあ、アレだ。爵位によって下駄を履かすからな」

「へえ、そうなんですか」

「ん？ あまり興味ないか？」

平然と応えた私に、師匠が少し訝しげに首をかしげる。

確かに少しずるいとは思うけど、私にはあまり関係ないからね。

正直、試験報酬金にさえ影響しなければ、一位じゃなくても別に構わないし。

貴族は学校に寄付もしてくれてるし、奨学金、報酬金は辞退してくれる。

私の奨学金や報酬金はその寄付から出ていると思えば、むしろお礼を言っても良いくらい。  
 い。

下駄くらい、いくらでも履かせてあげてください。

そんなことを私が言うと、師匠は笑って頷いた。

「学校の成績なんて、錬金術師になつてしまえば関係ないからな。レベルを上げていけるかは努力次第だ。——ああ、退学の判定については貴族の成績も同じように評価されるから、水準以下の錬金術師はいないからな？」

ただし、卒業後の就職については、若干成績順位が影響するらしい。

けど、採用する方も貴族の履いている下駄の事は知っているので……。

——正当に評価されない貴族の方が逆に大変なんじゃ？

学校には態度の大きい貴族もいたけど、そこまで酷いのはいなかったし、私を可愛がっ

てくれた一つ上の先輩が侯爵家の息女だったので、私が絡まれる事も無かったから、そんなに悪い印象はないんだよね。

先輩たちが卒業した後の一年？

それも全く問題なかったよ。

ちょっと問題のある貴族は、まず最後の年まで学校に残れない。

それに、五学年まで残っている時点で、平民でも錬金術師になることがほぼ確実。

錬金術師の社会的ステータスを考えると、敵対するにはデメリットが大きい。

将来、もしかしたらマスタークラスの錬金術師になるかもしれないんだから。

「それで、師匠。出かけられますか？ あまり大金を持っているのも不安なので、錬金術大全たいぜんを買いに行きたいんですけど……」

「ん？ もう行くのか？ 今日の予定はもう無いから大丈夫だが」

♪錬金術大全（全一〇巻）♪。

それは一人前の錬金術師であれば、誰もが持っている錬金術のバイブルだ。

私が師匠のお店でバイトを始めてしばらくした頃、尋ねた事があった。

『錬金術師になれたら、最初に手に入れるべき物は何ですか？』と。

その時に薦められたのがこの本、♪錬金術大全♪である。

錬金術の入門にして最奥。錬金術全ての技術が記されているというその本さえあれば、錬金術師としての道程は示される。

『そんな凄い本、いつたいてどこで手に入るの!』と思った私に、師匠は気軽に付け足した。

『ちなみに、学校の購買で買えるよ』と。

最奥が学校の購買で手軽に買える。

そんな現実になんだか釈然としなれないものを感じながらも、私は次の日、頑張って貯めたお金を握りしめ、嬉々として購買に向いた。

そして崩れ落ちた。

購買のおばちゃんが告げた定価、なんと七五〇万レア。

王都ですら、それなりに広い一軒家が余裕で買えるお値段だ。

錬金術師であっても新米が簡単に払える額では無い。

ましてやそれ以前の学生はなにかいわんや、だ。

これって、購買で売っていて良いお値段ですか？

普段ここで私が買っている、一〇〇レア程度のノートやインクとのギャップが凄すぎな

んですけど。

場所的には気軽だけど、値段的には全然気軽じゃないやい！

当然、私は購入を諦め、師匠に愚痴った。

そうすると、師匠は苦笑して『だから普通は、見習いでお店に入って金を稼ぐんだがな。そもそも一〇巻まとめて買う必要も無い』と言いながら、一つの抜け道を教えてくれた。

『私を通せば五〇〇万で買える。卒業までに貯めることができたなら、安く買わせてやろう』と。

五〇〇万！ なんと二五〇万レアものディスカウント!!

……いえ、それでも普通に家を買えるお値段ですけど。

しかし、なぜこんなにも錬金術大全は高額なのか。

その理由の一つは、この本自体が特殊な錬成具だからだ。

錬金術師でなければ読む事ができず、それ以外の人にとってはただの白紙の本に見える。更に錬金術師であっても、そのレベルによって読める巻が異なる。

いや、正確には逆で、読める巻によってレベルが決まる。

学校を出たばかりの卒業生が読めるのは一巻までで、レベルで言うなら一。

以降、読める巻数が増える毎にレベルが上がり、一〇巻を読めるようになった段階で、レベル一〇。一般的には、レベル三までが新米で、四から初級、七から中級、一〇に至ってようやく上級錬金術師と呼ばれるようになる。

そんな上級錬金術師になれるのは錬金術師の中でもごく一部で、それを更に越えたところに至った者が師匠のようなマスタークラスである。

そのような物であるからこそ、この本の真贋を判定するのは難しい。

普通の人では、ただの白紙の本との区別が付かないのだから、『これが錬金術大全です』と言われても否定も肯定もすることができない。

新米錬金術師でもそれは同様で、一巻以外が白紙でも、偽物かどうか判らないのだ。そこで必要となるのが保証制度である。

自身を確認できる錬金術師に立ち会ってもらい、本物であると裏書きをしてもらうのだ。だが、一〇巻まで購入すると必要となるのは上級錬金術師以上。

数少ない上級錬金術師に立ち会ってもらい裏書きをしてもらう。当然、無報酬とはいかず、それは商品代金に乗せされる。

これが錬金術大全が高価であるもう一つの理由である。

ちなみに、錬金術大全は時折古本屋で販売されていたりするのだが、師匠曰く『ほぼ確実に偽物だから絶対に手を出すな』とのこと。

もちろん、廃業した錬金術師から流れた本という可能性もゼロじゃないのだが、一、二巻ならともかく、一〇巻ともなればまずあり得ないらしい。

少なくとも師匠は、古本屋で本物を見たことは無いという。

質の悪いところになると、レベルが低いと確認できないのを良いことに、初級錬金術師でも確認可能な三巻ぐらいまでは本物を使い、後は全部偽物にするというような騙し方をするのだから。

それでも正規品の値段が値段だけに、時に手を出してしまう錬金術師がいて、泣きを見るらしい。

「しかし、本当に五〇〇万レアを貯めるとはなあ……」

なんだか師匠が感慨深げに私を見ているんだけど、私も全く同感である。

本気で節約したからなあ……。

一般的には大金と言われる額を持っていながら、この五年間、一度も嗜好品を買わなかった私、褒められても良いんじゃない？

うん、凄いで、私！

「それで、買いに行くのは良いんだが、どうやって持ち帰るつもりだ？」

「え？ それはこれに入れて」

そう言ってる私はクルリと回り、背負っているバッグを師匠に見せる。

中に入っているのは、勉強道具と現金を除けば僅かな着替え程度。

これが必需品以外を買っていない、私の全財産である。

貧乏性の私は、飾り気はないけど丈夫で大きめのバッグを選んでいたの、まだまだスペースに余裕はあるし、多少重い本を入れても大丈夫！

そう思っって自信満々に示したのだが、師匠には不評だったらしく、ため息をつかれてしまった。

「はあ……。ちよつと奥に來い」

「あ、はい」

少し呆れたような師匠に連れてこられたのは、普段は上がらない二階の一部屋。

たくさんの本が並び、少し薄暗い。

部屋の中央には大きな机があるが、やや雑然と物が置かれ、あまり片付いてはいない。

「ちよつと待ってろ」

そう言われて、素直に待つこと暫し。

「これが、錬金術大全、三巻から一〇巻だ。一巻と二巻はお前も見ただことあるな？」  
 そう言いながら師匠が机に積み上げたのは、八冊の本。

「……おや？　なんかぶ厚くないですか？」

……八冊？　これで？

私が師匠の仕事場で読ませてもらっていた錬金術大全の一、二巻は、せいぜい二センチ程度の厚みしか無かった。

だのに、今机に積んである本の高さは全部で五〇センチはある。

「コイツはな、巻が進むにつれ、だんだんとぶ厚くなるんだ。ちよつと持ってみろ」

「あ、はい」

師匠に言われるままその本のタワーを持ち上げる。

「ぐ、ぐぬぬぬ。お、重いです」

「だろう？」

私の細腕でも持てないことはない。

バッグに入れることも……たぶんできる。

だけど、これから私は修業先を探して、そこまで移動しないとイケないのだ。

そしてその場所は、おそらく王都ではない。

そんな旅行に耐えられるかという……。

「どうだ？　やはりウチで働かないか？　大全を買う必要も無く、修業先を探す必要も無いぞっ！」

「むむむむっ……そ、それは……いえっ！　やつぱり遠慮させてください！」

ニヤリと笑って私を誘う師匠に、私は断腸の思いで首を振った。

正直、師匠ほどの腕を持つ錬金術師に弟子入りできる機会なんて、ほぼあり得ないだろうし、ここで学んでいけば順調に才能を伸ばせることはほぼ確実。

師匠も随分と私を買ってくれているようで、バイト時代から誘われてはいた。

だけど、それでも私が首を縦に振らなかつたのは、自分の世界がとても狭いことを自覚していたからだ。

幼い頃に孤児院に入り、その直後から錬金術師を目指してひたすら勉強。

学校に入っても、やった事と言えばバイトと勉強のみ。

行動範囲も、学校と師匠のお店、それに掛け持ちしていた他のバイト先ぐらい。

このまま師匠のお店に入ってしまったえば、ほぼ確実に世間知らずのまま成長してしまうのでは、という危機感があった。

それを考えると、少なくとも一度は独り立ちをすべきと思うのだ。

「ふむ。やはりそうか。残念ではあるが、まあ、外に出るのも良い経験だろう。そんなお前に卒業祝いだ」

これまでも何度か断っているだけに、私がそう答えるのは予想通りだったのか、師匠は軽く頷くと一つのリュックを私に手渡ししてくれた。

私を持っている実用性一辺倒な物に比べ、そのリュックは二回りほどは小さく、ちょっとオシャレな形。

綺麗な赤に染められていて、カワイイ。

街中のちょっとしたお出かけには良さそうだけど、長期の旅行には容量不足だよな。

今回は私のバッグの中で出番待ち、かな？

「ちなみに、それには容量拡大と重量軽減などの効果が付与してある。それに入れば大全部持っでの旅行も可能だろう」

「……えっ!? 本当に？ 良いんですか？ 凄く高いですよね？」

「買ったらすうだが、私が作った物だから気にするな」

「ありがとうございます！」

オシャレなだけのリュックかと思ったら、どうやら錬成具だったらしい。

私の現状において、このリュックはすっごく嬉しい。



というよりも、これが無かったらまず錬金術大全なんて持ち運べないよね。

……マスタークラスの錬金術師が作ったこのリュックが、一体いくらなのかは考えないことにする。怖くなるから。

「ああ、あと、盗難防止も付けていたな。お前以外には使えないから、もし人に譲るなら、その部分を変更できるレベルになるまで頑張り」

「いえ、そんなことしませんよ！　せっかく師匠から貰った餞別なのに！」

私はむふふっと笑って、早速リュックの中に手を入れてみる。

「おおお〜」

見た感じは私の背中にちょうど良い大きさなのに、私の腕がすっぽりが入ってしまう。ついでに持っていたバッグを入れてみても、中にはまだまだ余裕がある。

外から見た大きさだけなら、バッグの方が明らかに大きいんだけどね。

「さすが師匠！　凄いですね！」

「まあ、これくらいはな。それよりも買いに行くんだろ？　あまり遅くなると購買が閉まるぞ？」

私が目を輝かせて見上げると、師匠は平然とした表情で視線を逸らし、話を変えた。

「あ、そうでした。今日中に買って、ついでに修業先も見つけないと！　もう察には泊ま

れないから」

出身の孤児院には、たまに顔を出していたし、卒業の報告にも行くつもりだけど、さすがに『泊めてください』とは言いづらい。

だからしばらくの間は、宿に泊まって就職活動。

でも、王都の宿は結構高いんだよねえ。

もちろん場所によっては安いところもあるみたいだけど、そんなところに私みたいな女の子が泊まったら危ない……らしい。聞くところによると。

「しばらくウチに泊まっても良いぞ？」

「いえ、ケジメですから！」

一応、今年で成人は迎えたのだ。自立しないと！

下手すると居心地が良くて、ずるずると……なんてなりかねない。

私は師匠を急かして、学校の購買へ急ぐ。

卒業した直後に逆戻り、というのもなんだか風情がないけど、実のところ、錬金術師の道具が買えるのはここぐらいだったりする。

入学当初は知らなかったのだが、錬金術師の道具は基本的には受注生産で、それ専門で成り立つほどお客——つまり錬金術師はいない。

結果的に学校の購買ですべて扱<sup>あつか</sup>う形になっているんだとか。

「すみませーん」

購買に入って声を掛けると、奥からいつものおばちゃんが出てきた。

「あ、サラサちゃん、卒業おめでとさん」

「ありがとうございます。おかげさまで、無事に卒業できました」

笑顔<sup>えが</sup>でお祝いを言ってくれるおばちゃんに、私は頭を下げてお礼を言った。

ここでは類<sup>ひんばん</sup>繁に紙やペン、インク類を買っていたので、おばちゃんとは仲良しなのだ。

私が孤児院出身のも知っているので、時々、廃棄<sup>はいき</sup>予定の商品をタダでくれたりするなど、色々とお世話になっていた。

この学校では、僅か三人の友達と教授たちを除けば、悲しいかな、私の知人はこのおばちゃんと図書館の司書くらいしかないのだ。

もちろん、お祝いを言ってくれる人も……ね。

「あの、頼<sup>たの</sup>んでいたあれは入荷<sup>にゅうか</sup>していますか？」

「ああ。ちよっと待っとくれ」

そう言っておばちゃんが奥から持ってきたのは、もちろん、錬金術大全（全一〇巻）<sup>じゆんこう</sup>。先ほど師匠の部屋で見た物に比べると外装が新しいが、その重厚感<sup>じゆうこう</sup>は同じである。

これが定価七五〇万レア。

ちよっとしたお屋敷<sup>おやしき</sup>よりも高いのだ。

「えーっと、サラサちゃんは保証不要で間違<sup>まちが</sup>いないわね？」

「はい。そのために師匠に来て頂きましたから。——では、師匠！ お願<sup>ねが</sup>いします!!」

「ふむ。そんなに力を入れることでも無いと思うが」

私がささっと場所を譲り、師匠にどうぞどうぞ、と手で示すと師匠は軽く苦笑<sup>くしやう</sup>して頷<sup>うなず</sup>き、それぞれの巻をパラパラと捲<sup>めく</sup>る。

そしてサラサラと最後のページに署名をする。

その間、わずかに数分ほど。

その署名の横におばちゃんがぺたぺたとハンコを押せば作業は完<sup>かん</sup>了<sup>りょう</sup>。

これでマスタークラスの錬金術師が確<sup>か</sup>認<sup>にん</sup>し、学園がそれを認めたという証明になる。

ちなみに、保証は要<sup>い</sup>らないから裏書き無しで売って、と言っても通らないらしい。

裏書きが無いのに本物、という紛<sup>ま</sup>らわしい物を作らないための対策<sup>たいさく</sup>だとか。

傍<sup>そば</sup>で見てるだけなら、簡単な作業<sup>さぎょう</sup>なのだけど、このお仕事、お値段的には二五〇万レア

なんだよねえ……。

それを考えれば、見つめる私の視線にも力が入るうものだ。

と言つても、実際のところ、この作業を師匠が請け負つたとしても二五〇万レア全額が師匠に支払われるわけではない。

適したレベルの錬金術師をコーディネートするための事務手数料として、ある程度は学校側の取り分もある。

それでもその大部分は錬金術師の物になるわけで……上級の錬金術師ってシャレにならないね！

一般庶民の数年分を一日……というか極端なこと言えば数分の作業で稼げるんだから！

——と思つただけで、後から聞いてみると、実はそんなに良いお仕事でもないらしい。まず、ほとんどの錬金術師にとって、依頼される機会自体がほぼ無い。

六巻程度までであれば学校の教授が対応できるため、外部に依頼する必要が無いし、それ以上となれば、必要となるのは上級錬金術師。

この時点で大半の錬金術師は対象外になる。

更に、仕事を請けた場合、売買等で持ち主が変わつた時など、自分が裏書きした本の真贋判定を依頼されれば、対応しないとイケない。

そのあたりの手間も含めてのお値段なんだから。

そもそも一〇巻まで購入する人がほとんどいないため、仕事自体が発生しないのだ。

あれ？ 一〇巻まで買う人、少ないの？

——いやいや、師匠、私に買えて言つたよね？

それを信じてお金貯めたんだよ？ と、話を聞かされたときは思ったのだけど、すぐにタダで裏書きをしてもらつたことを思い出したので、もちろん師匠に文句を言つたりはしなかつたよ？

「よし、できたよ、サラサちゃん。五〇〇万レアね」

「はい、ではこれで……」

虎の子の白金貨を五〇枚、カウンターに並べる。これが私のほぼ全財産である。五年間頑張つた、私の血と汗の結晶。

必要とは解つてるけど。

必要とは解つてるけどっ！！

「はい、毎度」

私が内心、ぶるぶる震えながら出した白金貨を、さらっと回収するおばちゃん。とんでもない大金なのに、まったく気負つた様子も無い。

私が購買で買うのは安い物だけだったけど、錬金術の道具も扱うだけに、きつと白金貨も普通に使われてるんだろうなあ。

「しかし頑張ったね、サラサちゃん。普通、卒業生は買うとしても三巻までだよ？ それくらいなら、まだ安いからね」

おばちゃんの言うとおり、三巻までなら学校の教授に裏書きを頼めるので、高額な裏書き代は必要無いし、仲の良い教授がいれば、値引き交渉だって可能。

なので、多少お金に余裕がある卒業生は、そのあたりまでを買って修業に出るのが一般的だし、私も師匠のお店でバイトができれば、そういう選択になったと思う。

「ははは……それは全部師匠のおかげ、ですね」

私は苦笑しながら、師匠から貰ったリュックに錬金術大全を丁寧<sup>れんきんじゆつたいぜんていじん</sup>に収めていく。

これが無ければ持ち運びにも苦労しただろう事を思えば、本当に師匠には頭が上がりな  
い。

リュックに大全を入れ終えた私は、気合いを入れて立ち上がる。

「よっこい、しょっと！ と、っと!?!」

が、予想と異なる重さにバランスを崩<sup>くず</sup>しかけ、師匠に支えられて何とか立て直す。

「大丈夫かい、サラサちゃん？ かなり重いだろう？」

いえ、減茶<sup>めぢやく</sup>苦茶<sup>くぢあ</sup>軽いです。

さすが師匠。重量軽減のレベルが半端<sup>はんぱ</sup>ない。

でもわざわざそんなことを宣伝しても仕方ないので、曖昧<sup>あいまい</sup>に誤魔化<sup>ごまか</sup>しておこう。

「あ、いえ……大丈夫です。おばちゃん、お世話になりました」

「いや、良いんだよ、サラサちゃんは頑張ってたからねえ。また機会があれば来ておくれ」  
笑顔で手を振<sup>か</sup>ってくれるおばちゃんに頭を下<sup>さ</sup>げ、私は師匠と共に購買を後にする。

「さて、次は修業先探しか？ せっかくだ、私も付き合<sup>あ</sup>って良いところを選んでやろう」

「はあ、ありがとうございます。……って、そうじゃなくて、このリュック、すっごく軽  
いんですけど!?!」

元々入っていたのは着替<sup>き</sup>えなど軽い物だったので気が付かなかったけど、錬金術大全を  
入れても全然重<sup>おも</sup>くならない。

いや、もちろん重<sup>おも</sup>くはなっているのだが、予想していた重さの一〇分の一も無い。  
さつき転<sup>ま</sup>びかけたのだから、あまりにも予想外に軽<sup>かろ</sup>かったから。

「重量軽減が付いていると言<sup>い</sup>っただろう？ それぐらいじゃないとお前、大全を持って旅  
行<sup>りょ</sup>できまい？」

「それは……そうですね」

自慢<sup>じまん</sup>じゃないが、私は力が無い。

理由<sup>りゆう</sup>？

それはまあ、勉強ばかりしていたら、そうなるよね？  
元々小柄な方だし、身体を鍛えなければどうなるかは自明のこと。  
悲しいことにね。

「……いえ、ありがとうございます。正直、非常に助かります」

このリュックの効果とそこから想定されるお値段を考え、もう一度師匠にお礼を言う。  
卒業祝いとはいえ、タダで貰うのが怖いけど、断って返したところで師匠は受け取らないだろうし、ありがたく貰っておいた方がきつと喜ぶ。

少し無愛想に見えるけど、その実、とても優しい。

師匠はそんな人だ。

「ふむ。まあ、弟子の門出だ。それぐらいは気にするな」

にやつと笑って、頭をポンポンと撫でてくる師匠に私は苦笑を返し、学生支援課へと向かう。

そこでは在学中のバイト先紹介の他、卒業後の就職支援も行ってくれる。

私は師匠のお店以外にも掛け持ちでいくつかバイトをこなしていたので、ここのお姉さんとは、名前を覚えてもらえるぐらいには仲が良い。

私がいつものように「こんにちは」と入っていくと、暇そうな担当のお姉さんから「い

らっしゃーい」と軽い応えが返ってくる。

が、師匠を見た瞬間、お姉さんは数秒前の様子が嘘のように、ぴしりと背筋を伸ばし、完璧な営業スマイルを浮かべた。

「本日はどのような用件で？」

「え、えっと、修業先を探したいので、求人を見せてもらえますか？」

「わかりました。少々お待ちください」

私が少し戸惑いつつ、そう言うと、お姉さんは席を立てて棚の方へ歩いて行った。

口調がいつもと違い丁寧なのは、師匠の効果なのだろう。

普段付き合っていると感じないけど、これでも師匠は錬金術師の超エリートなんだよね。

「ふむ。人がいないな？」

カウンターにいたのはお姉さん一人で、学生は一人もいない。

普段はもう少し人がいるので、こういう光景は珍しい。

「あー、それは今日が卒業式だったからですよ」

バインダーを手に戻ってきたお姉さんが、師匠の疑問に答える。

「ああ、そうか。私も卒業式の後には友人同士でパーティーとかやったな。本格的になるのは明日からか。サラサは……」

「募集要項、見せて頂けますか？」

師匠の何か言いたげな視線をさらっと無視し、お姉さんに手を差し出す。

ええ、どうせパーティーするような友達はいませんよ！

誘われもしなかったよ！

去年は先輩たちが誘ってくれたけど、知らない人ばかりで気後れして参加できず、その翌日、先輩も含めた四人だけで食事会をしただけだよ！

そんなことを思いながらバインダーを捲っていると、師匠がなにやら優しげな眼差しで私の頭を撫でてきたが、そんな無視である！

「すまないが、空き店舗情報を見せてくれるか？」

「あ、はい。こちらになります」

店舗情報は傍にあつたのか、お姉さんがすぐに師匠に差し出す。

「あれ？ 師匠、お店を増やすんですか？」

すつごく繁盛してるから、支店を増やしたり、店舗を大きくしたりすること自体は不思議でも何でもないけど、師匠つてそっち方面には興味なさそうに見えたんだけど。

「そういうわけじゃないが……それより、良いところはあつたか？」

「いえ、今のところは……」

私が見ているバインダーには、現時点で弟子の受け入れが可能な錬金術師のお店が載っている。

この中から自分の条件に合うお店を探し、面接を経て就職、そこで経験を積みながら、ある程度のお金を貯め、自分のお店を買って独立、というのが一般的な錬金術師のキャリアプランだ。

就職活動に必要な資金のことを考えると、可能ならば近場。

でも……王都のお店はないなあ。学校があるだけに、人材は過剰気味なんだよねえ。

多いのはやっぱり地方。先輩たちが就職したのも地方だったし。

就戦できるなら、あまり場所にこだわりは無いけど、難点は面接に行くのにかかる時間と費用。

交通費と宿泊費を使った上で不採用となれば、払ったコストは無駄になる。

もし上手く採用されても、部屋を借りたり、生活必需品を揃えたりするにもお金は掛かる。

学校の寮ではそのへん、支給してもらえたんだけど……錬金術大全を買ってしまった現在、私に余裕は、あまり無いんだよねえ。

そんな事を考えると、コネで知り合いのお店に就職するのが一番安心。

だから本当は、師匠が私を誘ってくれたのは、すつごく幸運な事。

そんな話を蹴った私に対して、師匠は残念そうな顔をしながらも、少しだけ嬉しそうに私の考えを認めてくれて、『困ったら戻ってくるように』という言葉まで贈ってくれたのだから……。

「ちなみにサラサ、就職活動に使える資金はどのぐらい残っているんだ？」

「うっ……」

募集を出しているお店までの距離と、そこに行くのに必要な費用を必死で計算している私に、師匠がズバリと訊いてくる。

そんな師匠に、躊躇いがちに伝えた私の答えに、師匠は呆れたようにため息をつく。

「錬金術大全を買った時点で予想はしていたが……。そんなお前に、お薦めの物があるんだが？」

そう言つて師匠が差し出したのは、売り出し中の店舗情報をまとめたバインダーで、基本的には廃業した錬金術師の中古物件。

錬金術師のお店は、その性質上、一般人には必要ない設備が多いだけに、学校ではそういった不動産の仲介業もまた行っているのだ。

「何ですか、師匠。お薦めつて……。え!? 安つ!」

師匠が示したページに書かれていた店舗の価格、なんと一万レア。

錬金術大全のおかげで大幅に減った私の資産でも、十分に払えてしまう金額。

「な、何ですか、このお店!？」

「店舗部分はやや狭いが、居住スペースあり、薬草畑あり、各種設備と道具付き。場所は田舎だが、かなりお買い得だな」

間取りを見ると師匠のお店のように広くはないが、そもそも田舎は客が少ないので、そんなに広いスペースは必要ない。

二階建てで、師匠の言うとおり居住スペースがあり、井戸もある。

裏にはかなり広い畑が付いていて、必要とあればそこで薬草も育てられるようだ。

「……いえ、安すぎるでしょう! あり得ないですよ!」

家として安いかかそういうレベルではなく、安すぎる。

王都なら一、二ヶ月分の家賃程度の金額でしかなく、一回面接を受けに行く費用だけでも十分にお釣りが来る。

正直、何か危ない部分があるんじゃないかと疑いたくなる。

——仲介が学校だから多分大丈夫だとは思うけど。

「まあ、あれだ。補助金がそれなりには出ていると思うぞ?」

「あ、なるほど。それなら……まあ……」

補助金とは、錬金術師が店舗を構える際に国が支援してくれるお金のことだ。

国としてはそれぞれの街に錬金術師のお店を作って欲しいのだが、どこにお店を構えるかは錬金術師の自由。

一番人気はやはり人口の多い王都で、その周辺の大都市が二番手と言ったところ。

お客の少ない不便な田舎にわざわざお店を開くことは、誰だって避けたい。

そこで出てくるのが補助金である。

人が行きたがらない場所ほど多く、王都などの都会には補助金無し、と差を付けて、なんとか人を確保しようとした国の仕組み。

修業中の新米錬金術師にとって、店舗を購入する資金を貯めるのはかなり大変なので、早くお店を持ちたい錬金術師は大抵その恩恵にあずかっている。

しかし、逆に言うなら――。

「つまり、このお店は一万レアで売ってもかまわないほど補助金が出る、とんでもない田舎にある、と?」

一応、住所は書いてあるのだが、聞いたことが無い。

少なくとも私の知識に無いくらい、小さな町であることは確実だよね。

「ここは大樹海の傍にある小さな町……いや、村にある」

「大樹海って……ここから馬車で一ヶ月くらい掛かりますよね?」

「そうだな。ただ、錬金術の素材は手に入りやすいから、技術を上げるには悪くない場所だぞ? ——客は少ないかもしれないが」

大樹海とはこの国の辺境で、南北に伸びる大山脈とその麓に広がる樹海のことを言う。正式名称は、ゲルバ・ロッハ山麓樹海で、各種植物・昆虫・鉱石などの錬金術関連素材が多く取れることで有名だ。

なので、師匠の言うとおり腕を磨くには最適な場所ではあるのだけ……。

「お客さんがいないのは致命的ですよ? 私、貯蓄はすべて吐き出したんですから、お客さんが来ないと生活できませんし」

そうなのだ。

産地近くということで、各種素材が安く手に入ったとしても、製品が売れなければどうにもならない。

大金を買う前ぐらいの蓄えがあれば、数年間そこで腕を磨くという選択肢もあったかもしれないが、今の蓄えでは生活ができない。

「ふむ、良いと思うんだがな」

「第一、私は今日卒業したところでですよ。いきなりお店を持つなんて……」

「それは問題ない。全くの素人ならともかく、お前は何年もウチの店で働いてきただろう？ それなりにやっつけていけると思うぞ？ レベルは三になってるし」

「……え？ 三？」

「ああ。——サラサ、お前、錬金術師のレベルはどうやって上がるか知っているか？」

「そういえば……？」

錬金術師のレベルがとくとか、マスタークラスがとくとか言うわりに、どうやってレベルを上げるのか学校では教えられなかった。

研鑽けんさんしなさいとか、努力しろとか言われるだけで。

「ふむ。まあ、資格を取った後、弟子入り後に教えられるのが普通だからな」

そう言って師匠ししょうが教えてくれたのは、錬金術大全の各巻に載っている物をすべて作製できればレベルが上がる、ということだった。

つまり、一巻の物をすべて作ればレベル二に、二巻の物をすべて作ればレベル三になる。

学生の内うちに教えないのは、早くレベルを上げようと、正式な資格も無いのに無理して錬金術を行使ぎしたりしないように、ということらしい。

「そういうえば、バイトで色々作りましたね。え？ つまり、私はいつの間にか一、二巻の物はすべて作っていたんですか？」

「そういう事だ。あのあたりは一番よく使われる物が載っている巻だからな」

師匠の指導しどうの下、結構な種類を作ったと思っただけ……。

いや、たぶん、それを考えてやらせてくれたんだと思うけど。

「だから、お前なら店ぐらいいは開けると思うぞ」

「でも……商売のことは何も知らないんですけど」

師匠の言うとおりであれば、確かに売れ筋商品を作るのは問題無さそう。

しかし、バイト期間中に私がしたのは作製のみで、販売はんばいなどには関わっていない。

つまり、値付けや仕入れ、その他経営のことに關かかわっていない。

「うーん、そうだな……よし、こうしよう。お前が定期的にあの近辺の珍しい素材を送ってきたら、それを私が買い取ろう。これなら生活に困ることはないはずだ」

それなら、生活費ぐらいいは稼かせげる、のかな？

贅ぜいたく沢たくをしたいわけでもないし、修業しゆぎょうと考えれば、それもまあ……つて。

「——師匠、まさかそれが狙ねらいで？」

「私はいつも、弟子の将来を考えているよ」

普段見せないようなさわやかな笑顔で、私の頭を撫でてくれる師匠。

「はあ、それはありがたいでございます。——いえ、否定しませんでしたよね!」

「ああ、君、これの契約はどうすれば良いのだ? ——ここで金を払えば権利書が貰える。と。じゃあ、これで」

私の抗議をさらっと無視し、師匠は自分の財布から取り出したお金で権利書と鍵を受け取ってしまった。

そして、その権利書をささっと畳み、鍵と共に私のポケットに突っ込んでしまう。

「さあ、これでサラサも店持ちの立派な錬金術師だ。おめでとう! あ、それは私からの贈り物だ。受け取ってくれ」

「え、え、えええ〜」

私の肩をポンポンと叩きながら、にこやかにそんなことを言う師匠。

なんか、怒濤の勢いで私の将来が決まってしまった。

え? 私、ここに就職先探しに来たんだよね?

それがいつの間にもやら独立した店長ですよ?

「ししよ、すごい不安なんですけど」

「まあ、手助けはしてやるから頑張ってみろ。借金さえしなければ、失敗して戻ってきて

も雇ってやるから」

「はあ……」

そういう事なら——良いのかな?

王都に帰れる旅費さえ確保しておけば、師匠のお店で働けるわけだし?

見習いのバイトでも十分な賃金をくれていたのだから、就職してもひどい思いをする。ことは無いはずだ。

なんとと言っても私はすでに錬金許可証を持っているのだから!

「わかりました、頑張ってみます!」

そう言っただけで、手をぎゅっと握る。

「うん! その意気だ!」

そんな私の様子を見て、師匠が満足そうにウンウンと頷きながら激励してくれる。

……あれ? これって師匠に乘せられてない? 気のせいかな?



師匠のお店に戻った後、師匠は私のために卒業パーティーを開いてくれた。決して私がボッチなのを憐れんだのでは無く、純粋な厚意……なんだと思いたい。参加者はお店で働いている人たち。他の人たちは来ていない。

急なことで予定が合わないだろうしね。予定がね！

私にだって、呼んだら来てくれるかもしれない人ぐらい、少しはいるんだよ！  
他のバイト先の人とか！

誘っては無いけど。

決して微妙な表情で断られるのが、怖いわけじゃない。

「しかし、師匠。突然パーティーなんて、準備が大変だったんじゃないですか？」

会場のテーブルには、私が食べた事の無い豪華な料理とお酒類が並んでいる。

すでに結構な量を頂いたけど、どれもとっても美味しく、いくらでも食べられるような気がしてくる。

もちろんそんなことは無理なので、ちよつとずつ、いろんな料理をつまんでいるのだが。

——高そうなのから食べるのは基本だよな！

「このくらいなら大したことない。作ったのはあいつだしな」

そう言つて師匠が指さしたのは、いつもカウンターで接客を担当しているお姉さんのマリアさん。

そちらに目をやると、マリアさんがニッコリと笑つて手を振る。

え？ この豪華料理を？

プロの料理人が作ったみたいなんですけど。

「で、でも、高価そうな食材とか、お酒とか……」

「ん？ これくらいは普段から使っているぞ？ 多少は買い出しに行つたようだが」

おお、師匠くらいになると、このくらいの食事が普通なのか！

普段は寮でしか食べない、私の食事とは比べるべくもないけど、たぶん、高級料理だね！

「お前、節約しすぎじゃないか？ 私も学生時代、そんなに金は無かったが、試験が終わったときなんかには、このくらいの料理を出す店には行つていたぞ？」

あれ？ そんなに高級料理じゃない？

「——というか、師匠がお金を貯めろつて言つたんじゃないですか！」

「そうだったか？ 貯まったら鍊金術大全を安く買わせてやるよと言つた気がするが」

「同じ事ですよ！ 買うべきだと言われたら、貯めるに決まつてるじゃないですか！」

何を言っているんでしょう、この師匠は！

あんなこと言われたら必死で貯めますよ！

二五〇万レアもお得なんだから！

「いや、別に一〇巻まとめて買わなくても良かっただろう？ 例えば五巻までとかでも私

が行けば安くなるんだから」

「そっ……、そう、なん、ですか？」

「保証金分はな。五巻までだとそんなに高くはないが」

聞いてない。聞いてないよー！

「それならそうと教えてくださいよ！ あんなに頑張って節約したのに！」

「いや、どれぐらい貯まってるかなんて知らなかったしな。それに一〇巻まとめての方が割安なのは確かだぞ？ 一〇巻だけを買う場合も上級錬金術師が必要だから、保証費用は高額になるしな」

たしかに、同じように来てもらうのだから、一冊だけの保証でも、一〇冊まとめてでもそんなに変わらないのかもしれない。

それなら結果的には良かったのかな……？

「そういえば、話は変わるんですけど、九巻まで熟せば上級錬金術師ですよ？ じ

やあ、一〇巻をすべて熟した場合はどうなんですか？」

「ああ、そいつはバカだな」

「………はい？」

あれ、聞き間違い？

「バカだ。一〇巻の前身……は読めないだろうが、厚みを覚えているか？ 特にぶ厚かったらろう？」

「そういえば、そうだった気がします」

大全をリュックに入れる時、一〇巻だけは片手で持ちにくいほどにぶ厚かったのを思い出す。

人一人ぐらい、簡単に撲殺できそうなレベルで。

「一〇巻には、それにふさわしい高度な錬成具も載っているが、大半はどうでも良いような、九巻以下に載せるのも無駄な代物なんだよ。だからまあ、作ることは難しくなくても、作るための時間と素材が無駄というわけさ。それをわざわざやるのはバカぐらいだろう？」

「それは、確かに……あ、でも師匠は上級以上のマスタークラスなんですよ？ それ

一〇巻を全部マスターすれば、マスタークラスなのかと思っていたんだけど。

「そうだな……一〇巻の中でも重要な錬成具を作れることがマスタークラスの条件の一つではある。それ以外は……」

「それ以外は？」

もったいぶったように私を見つめて、師匠が言った言葉は……。

「——秘密だ」

「ええ……。なんでですか？ 教えてくださいよ」

「マスタークラスは上級とはまた違った、それなりに大事な役割があるんだよ。もしお前が上級になって見込みがありそうなら教えてやるから、我慢しろ」

「うー、絶対ですよ？」

「まず上級になれるかどうかを心配しろ。そこまで到達できるのは、一握りだけだぞ？」

「それはそうですね……」

不満そうに見上げる私に、そう言って師匠は笑うと、持っていたワインを飲み干した。

「ほら、サラサも話してないで飲め。成人したんだろ？ 酒も楽しめないと」

「そ、そうですね。初挑戦です！」

厳密には無いけど、酒類を飲めるようになるのは一五歳の成人から。

私も少し前に一五歳の誕生日を迎えていたが、節約を旨としていた私に贅沢品のお酒と縁なんて全くなかった。

でも今日はタダ酒。飲まないのは勿体ないよね？

しかも多分、高級酒。

私はちょうど目の前にあったお酒をコップに注ぐと、そのまま師匠の真似をして呷った。その瞬間、喉の奥がカツと熱くなり、師匠の慌てたような顔が見え……。



翌日、私が目を覚ましたのは知らないベッドの上でだった。

確か昨日は……師匠がお祝いのパーティーを開いてくれたんだよね？

途中から記憶が無いけど、つまりここは師匠のお店かな？

ベッドから起き出し、部屋から出るとそこは見覚えのある廊下。

うん、やっぱりそうだね。

入ったのは初めてだけど、ここはお店の二階にある客間だったみたい。

そのまま階段を下り、人の気配のするお店の居住スペースに向かうと、そこにはテーブル

ルでのんびりとお茶を飲んでいる師匠がいた。

「師匠、おはようございます」

「おう。目が覚めたか。昨日はなかなか笑わせてもらったぞ？ 酒を一口飲んだ途端、テールに突っ伏して——くっ、ふふふふ……あーはっはっは！」

その時の様子を思い出したのか、途中でこらえきれなくなつたように吹き出すと、大声で笑う師匠。

そういえば、昨日は初めてお酒を飲んで……師匠の言うとおりなら、そのまま意識を失つた、つてこと？

——いや、酷くない？

確かに一口で倒れるとか、ちよつと情けないけど、そこまで笑うこと無いよね？

私が無然とした表情を浮かべると、一度師匠は笑いを収めたのち、再びニヤリと笑う。

「しかも、『ケジメだから』とか言っておきながら、結局ウチに泊まることになつたな？」

「くっ……それは……」

そうだった。半ば不可抗力とはいえ、自立すると決めた初日から、いきなり師匠の世話になつてしまつたのだ。

お酒に慣れていないからと言い訳したところで、もし酒場で前後不覚になつてしまつたら誰も助けてくれない。

成人した以上、そのあたりも自己責任なのだから。

「あのお酒が強すぎるんですよ……」

「確かに多少酒精の強い酒だな。ちなみに、値段の方もかなりの物だぞ？ 確か——」

「ストップ！ 言わないでください！ 更に立ち直れなくなる……」

師匠の言うかなりの物、なんて聞きたくない！

絶対、普通なら私の口に入るような値段じゃないよね！

そのお酒の味はおろか、飲んだことすら記憶にないんだけど、無駄になつたお金を思うと心だけは痛い。

「……もう、当分お酒は飲みません」

「それが良い。飲む時には是非また私に笑いを提供してくれ！」

そう言つてまた「くふふっ」と笑う師匠。

つまりまたお酒を飲んでぶっ倒れる、ということですね？ わかります。

——少なくとも、人前でお酒を飲むのは控えよう。

私も一応女だから、笑い話では済まないかもしれないし。

「とか言ってますけど、昨日、サラサさんが倒れた後、店長はかなり焦っていたんですよ？ 部屋に運んだのも店長ですし、落ち着くまで傍に付いていたんですから」

「あ、マリアさん」

私が落ち込んでみると、台所スペースからコップを持ったマリアさんがやって来て、そんな話を暴露した。

「マリア！ 余計なことを言うな！」

「あら、本当のことじゃないですか。慌てて錬成薬まで探しに行ってみましたよね？」

マリアさんは笑いながら、私に水の入ったコップを、「どうぞ」と渡してくれた。

喉が潤っていた私はありがたく受け取り、コップを傾けながらそっと師匠の様子を窺うと、さっきまで笑っていた師匠がなんだか無然とした表情で口をへの字に曲げている。

「ま、まあ、さすがにウチの店で人を死なすわけにはいかないからな！」

私が見ているのに気付き、師匠はコホンと咳払いして響めつ面ですんなことを言うが、マリアさんは気にした様子もなく苦笑している。

「本当に素直じゃありませんねえ。まあ、いいですけど。さて、朝食できましたよ。サラサさんも食べられますよね？」

「えっと……」

「食べていけ。朝食ぐらい、気にするほどの物じゃないだろう？」

これ以上世話になるのは、とちよっと躊躇した私に師匠はそう言うのと、マリアさん言うって三人分の食事を並べさせる。

「ありがとうございます」

正直な話、今日中に出立することを考えると、時間的にもかなり助かるのは事実。

私はお礼を言っ、やや急いで朝食を頂き、すぐに出立の準備を始めた。

準備とは言っても、私物はすべて師匠のくれたリュックに入っているし、用意する物と言えば食料くらいのも。

それらにしても途中のお店で買えば済むだけだから、身だしなみを整えて、リュックを背負えばそれで完了了。

そのまま師匠に挨拶してお店を出ようとしたところで、『これも持って行け、餞別だ』と言っ渡されたのは、錬金術関連の道具一式と各種素材、それに経営におけるアドバイス書かかれているらしい冊子。

冊子はともかく、錬金術の道具は決して安くない。

少なくとも、一般庶民ではそうそう手が出ないような金額なのは知っている。

高価なリュックをもらい、店舗の代金も払ってもらい、その上餞別までもらうのは……

と私が受け取りを少し渋<sup>しぶ</sup>っている、師匠は飄々<sup>ひょうひょう</sup>と『これでも私はマスタークラスの錬金術師だぞ？ 大した額でもないから気にするな。やや変則的とはいえ、お前はウチから独立して自分の店を持つ弟子なんだ。この程度の賤別、安いくらいだな』などと宣<sup>のたま</sup>った。

庶民がとても稼げないような額を、この程度と、か、さすが錬金術師、ハンパないです。更に出がけにマリアさんがコッソリ教えてくれたところによると、冊子の方も、昨日、私が寝てしまった後、師匠が朝方まで掛<sup>か</sup>かって書き上げてくれたものらしい。

うーむ、今朝、眠<sup>ねむ</sup>そうだったのはそれが原因なのか。

なら爆笑<sup>ばくしょう</sup>されたのも許せるかな。

徹夜<sup>てつや</sup>明<sup>あ</sup>けてハイになるしね。

って言うか、むしろ師匠に返せそうにない恩が積み重なっていくんだけど……。

錬金術大全の事も考えれば、私って師匠に数百万レアは援助<sup>えんすけ</sup>されている感じだよな？

……うん、これは頑張<sup>がんば</sup>って成功しないとね。少しでも恩返しできるように。

私はそんな決意を胸に、王都を旅立<sup>りょだつ</sup>ったのだった。

辺境の村で待ち受ける現実なんて知りもせず……。



そして現在、私は古びたお店の前で立ち尽くしていた。

「……はあ、どうこう言っても仕方ないか。もう来ちゃったんだから、何とかしないと！」

あの時の決意を思い出せ、私！

師匠に恩を……おや？ このお店を選んだの、師匠だよね？

——いやいや、師匠もこんな状況とは知らなかったんだし。

でも、就職じゃなくて、お店を買うことを決めたのも……。

——いやいやいや、師匠のことだもの。きつと私を思っただことだよ！ うん、きつとそうに違いない。そうでないと心が折れそう……。

「と、とりあえず、状況の確認からだよね！」

気を取り直した私は、改めてお店の外観を眺める。

確かに看板は傾いて今にも落ちそうだけど……よく見ると、家自体はそんなに傷んでないかも？

荒れた庭に朽ちた木の柵、汚れで中の見えない窓ガラスのせいで見窄らしくは見えないけど、屋根はしっかりしているし、壁の漆喰に蟻こそ入っていても実際に崩れている部分はない。

扉や窓もしっかりしているし、これは看板を直してお掃除さえすれば、結構悪くない物件かもしれない。

「うん！ よし！ ちょっとやる気出てきた！ まずは中に入ってみるかな」

ポケットから鍵を取り出し、草を踏み分けて扉に向かおうとしたところで足を止める。

「これって……薬草じゃない？」

扉に続く路地にも大量に繁茂する草。

それをよく観察してみると、錬金術の素材となる薬草がポツポツと生えている。

そういえば、薬草畑が付いているんだよね、この家。

そこから種が飛んできたのかもしれない。

ほとんどはただの雑草。

でも、薬草を踏まずに歩くのもまた難しい、なんとも微妙な割合。

路地以外にも生えているのだから、無視して踏み分けて行っても良いんだけど、私から見れば小銭が転がっているようなもの。

貧乏性な私が、小銭を踏みつけて歩くことができようか!?

「……回収、回収」

家に入るの少し保留にして、ひとまず路地の薬草回収を始める私。

一人人が歩ける範囲の草を抜いていく。

「雑草、葉草、雑草、葉草、雑草、雑草、葉草……」

ブツブツと呟きながら、引き抜いた草を分類して積む。

葉草一本一本は大した額じゃないけど、このまま扉の所まで回収していけば、庶民の一日分の収入ぐらいにはなるかもしれない。

もつとも、すぐに処理しないと価値が落ちるから、錬金術師だからこそ価値があるんだけどね。

そうやって、ひたすら草抜きをすること暫し。

「あら、お嬢ちゃん。何しているんだい？」

扉まで後半分ほどという所まで来た時、不意に後ろから声を掛けられた。

振り返ると、四〇代後半ぐらいの少し豊満な女性が立っていた。

「えっと……」

客観的に私の状況を見ると……空き家の前で、見たことも無い小娘が、ブツブツ言いながらひたすら草抜き。

うん、ちょっと怪しいね！

こういう小さな村って、すこし閉鎖的なのところがあると聞いたことがあるし、もしかし



て私、かなり不審ふしんに思われてる!?

「そのお店に用事……とも違うようだけど、そのお店はずっと前に閉店してるよ?」

「いえ! 違うんです! ここ、私の家! です。この家を買って引越ひっこしてきたんです!」

訝いぶかしげに言うおばさんに私は慌あわてて否定した。

閉鎖的なコミュニティに入るには、第一印象がとっても大事!

学校なら孤立こりりしていても問題なかったけど、ここで生活していく以上、ご近所さん達とは仲良くしないと!

おばさんネットワークはバカにできないから、私は慣れない笑顔えがおを必死に作って挨拶あいさつをした。

「よ、よろしくお願ねがいします!」

「買った? ということは、お嬢ちゃんお嬢ちゃんは錬金術師様!?

「は、はい! まだ新米ですけど、錬金術師です! サラサと言います」

「まあまあ。アタシはこの隣となりに住すんでるエルズつてもんだよ。つてもちよつと離はなれてるけど、何かあったらいつでも来ておくれ」

おばさん——エルズさんは店の左手の方を指さしながら、ニッコリと笑わらって応こたえてくれ

た。

よかった、ファーストコンタクトは取りあえず及第点きゅうてん、だよね?

もちろん、怪しい草抜き場面を見られたことは、頭の隅すみに放り投なげておく。

「しかし、またウチの村にも錬金術のお店ができるんだね。ちよつと不便ふびんだったから助かるよ! 頑張がんばつとくれ!」

「はい、ありがとつございませす。……ところで、このお店、何で閉店したかご存ぞんじですか?」  
経営けいぎやう不振ふんとかだと、色々考えないといけない。

師匠ししやうへの素材の卸あしだけでも最低限の生活はできそうだけど、錬金術師としてそれだけじゃ、ね。

「ああ、この店は高齢こうれいの爺じいさんがやってただけど、腰こしをやっちゃまってね。心配しんぱいした息子むすこが連れに來たんだよ。だから客の心配しんぱいはそんなに要いらないと思うよ?」

「そうなんですか?」

小さい村だから、あんまり需要じゅぎやうが無なさそうなんだけど。

そんな私の気持ちきもちが伝わったのか、エルズさんは苦笑くしやうしながら言う。

「そりゃウチは小さい村だけど、錬成れんせい薬やくは必要ひつよう不可欠ふかだからねえ。それに、この村は大樹おおい海うみに入る採集さいしゅう者ものたちが結構たいてい滞在たざいしてるから、そいつら向けの薬くすりを置おけば店みせは安泰あんたいさ。買かい

取りもすりゃ良い椽ぎになるんじゃないか？」

採集者とは、大樹海などの各種鍊金関連素材が採取できる場所に赴き、それらを集めて売ることを生業にしている人たちのことだ。

そういった場所は一般的に危険性が高く、必然的に怪我なども多くなる。

そのため採集者は、鍊金術師にとつて素材の供給源であると共に顧客でもあるのだ。

「採集者がいるのはありがたいですが、買い取りについては状況を見て追々でしょうか。

買い取っても販売先やここからの輸送も考えないといけないですし……」

「そうなのかい？ おばちゃん、そういった鍊金術の商売のことは解らないからねえ」

このように産地の近くで安く素材が入手できるのはある意味当然としても、それを安易に買い取つていては早晚破綻する。

まず、買い取つた物を、そのまま保存できることはあまりない。

放置しておけば、腐ってしまったりして使い物にならなくなるので、長期保存できるように下処理が必要となる。

それをするのは当然私なので、処理できる量以上に買い取ってしまったては廃棄物が発生してしまふ。

更に販売先までの輸送コスト、売れ残りや輸送時の破損による損失なども考慮した上で

値段を付けて購入しないといけない。

——と、師匠がくれた冊子に書いてあった。

各種素材の王都での販売価格や仕入れ価格の表まで付いていたのだけど、その価格を単純に参考にするだけだとすぐに赤字になるぞ、と注意書きが。

「買い取りはともかく、店の方はいつ開店する予定なんだい？」

「えっと、お掃除して、準備してだから……一週間ぐらい先でしょうか」

中を見てないのではっきりとは言えないけど、まだ商品を作っていないのでそのくらいはかかると思う。

「そうかい、そうかい。何か手伝えることがあったら言っとくれ」

「ありがたいございます」

和やかにそう言うエルズさんに、私は再び頭を下げた。



エルズさんを見送つた後、草抜きを再開した私は、程なく扉まで辿り着いた。

ポケットから取り出した鍵を、鍵穴に差し込んで回すと、軽い音と共に鍵が開く。

扉を引けば、予想外にがたつきも無く、スムーズに開く。  
「……思ったよりも、汚れてない、ね?」

扉を入つてすぐの所は店舗スペース。

埃が舞い上がる事も覚悟していたのに、棚も床も、予想外に綺麗。

「そういえば、錬金術師のお店だし、『清掃』の刻印があるのかな?」

通常、錬成具を作製する場合は、対象物を錬金釜に入れて錬成を行う。

では、錬金釜に入らないような錬成具は作製できないのかと言えば、そうではない。

そのための方法が、刻印<sup>アト</sup>である。

ただし、錬金釜を使う場合に比べると手順が複雑になる。

簡単な物なら特殊な塗料で文様を描くだけで作れるが、複雑な物になると複数の錬成具を特定の場所に埋め込んだり、対象物を刻印に合わせた形にしたりと手間が掛かる。

例えば家であれば、部屋や廊下の位置、部屋の使用用途、窓や煙突の有無なども刻印に含めてしまうのだ。

これにより、理論上は都市を丸ごと錬成具にすることも可能なのだが、錬金釜を使った場合と比べると手順の複雑さ以外にもデメリットは大きい。

まず第一に、効率が悪い。

同等の効果で比較するなら、必要な技術とコストは何倍にもなる。

また、錬金術師による定期的なメンテナンスや魔力の補充なども必要で、現状ではあまり一般的に使われるような技術ではない。

逆に言えば、錬金術師の店なら十分に使う価値があるんだけどね。

「師匠のお店だと、工房の壁にコアがあったんだけど……」

コアとは刻印の基点となる物で、最も重要な部分のことだ。

とはいえ、一度作つてしまえば、後は魔力を注ぐ時ぐらいしか使わないので、適度に邪魔にならない、それでいて魔力注入がやりやすい場所に設置するのが普通。

取りあえず、各部屋の窓を開けて空気を入れ換えながら、コアを探すことにする。

店舗スペースの右奥、カウンターの右側にある扉から続く廊下の左側には倉庫、工房、空き部屋と階段が並び、突き当たりにあるのが台所。

「……あ、ここにコアがある」

階段の下、壁の中に埋め込まれた魔晶石。

一見すると普通の石みたいで何か印があるわけではないが、そこから家全体に魔力が流れているため、錬金術師ならすぐに判る。

「でも、ほとんど切れてるね」

魔晶石から流れ出る魔力は極々微量で、刻印の維持だけで精一杯というレベル。

もう一年もすれば刻印自体が機能停止していたんじゃないかな？

「……取りあえず、めいっばい注いでおこうっと」

自慢じゃないけど、私、魔力量だけでは自信があるんだよね。

たぶん、師匠が採用してくれた理由の一つはこれ。

コアに触れて、そっと魔力を流していくと、魔晶石の周りに刻印の文様が浮かび上がってくる。

「うん、やっぱり『清掃』が……あれ？ それに『防犯』も含まれてる？」

学校の授業で簡単な実習をしただけで、家みたいに大型の刻印を作ったことはないが、習うだけは習っているので読み取れることはできる。

腕の良い錬金術師が作ったのか、かなり複雑な刻印になっているが、メインとして『清掃』、サブとして『防犯』が含まれていることは見て取れた。

若干よく解らない部分もあるが、家主に不利益な物は含まれていないはずなので、どんな魔力を注ぐ。

「……うーん、結構、容量があるね」

私の全魔力、その半分程度を注いだところで、いったん手を離す。

これで一杯にならないとか、魔力量に自信を持っていた私としては、なかなかシヨックなんだけど……。

錬金術師としては新米だけど、師匠にちょっと呆れられるぐらい魔力はあるんだよ？

「……まあ、いいか。動作に問題は無いし、ほちほち追加していけば」

刻印の機能さえ回復するなら無理して満タンにする必要も無いし、魔力を使い切ると、働く気力も無くなってしまう。

最低限、今日寝る部屋と台所だけはお掃除しておかないとね。

せつかく新しい家に着いたんだから！

二階の部屋は大小合わせて八部屋もあったが、すべての部屋は空っぽ。

一切合切、な〜んにもない。

備え付けの棚みたいに、動かせない物だけが残っている。

唯一の例外は、錬金工房。

あそこだけは手が付けられていない様子で、むしろ引越の際、何一つ持っていかなかったようにも見える。

ちよつと掃除すれば、明日からでも仕事ができそうなほど。

「普通、引越すにしても、ある程度の家具は置いていくんだけどなあ……?」

近所ならともかく、他の街ともなると大きい家具は運ぶ方が大変だから、知り合いにあげたり、古い家に置いたままにしたりする。

寮の私の部屋に置いていた小さいチェストも、そうやってもらってきた一品。

師匠の知り合いからもらっただけにちよつとした高級品で、お気に入りだったんだけど、さすがに持ち運べないので置いてきたのだ。

処分されると哀しいので、誰か新入生が使ってくれたら良いんだけどね。

……あ、もしかすると、この村にたまたま新婚さんでもいたのかな?

結婚して新居を建てた場合なんかには、こんな風に全部もらっていつて、足りない物だけを注文する事があるみたい。

新婚だからと、一気に全部、新品で揃えるなんて、金銭的に大変だからね。

「まあ、おかげで掃除が楽、かなあ……」

家の掃除が格段に楽になる『清掃』の刻印だが、残念ながら弱点もある。

一つはエクステリア——家の外壁や窓、屋根などには効果が出づらいこと。

ちよつとずつしか綺麗にならないから、常に雨風が当たる部分に関しては、追っつかな

いんだよね。

そしてもう一つは、家自体にしか効果が無いこと。

家具を置いていると、そこに積もった埃や汚れは綺麗にならない。

つまり、現時点で家具がほとんど無いこの家は、刻印の効果で、数日中にはほぼ綺麗になつている可能性が高かつたりする。

「とりあえず、ここを自室としておいて……」

南側の一番日当たりの良い部屋に荷物を置き、再度一階へ降りて台所へ。

一番気になるのは工房だけ……今入っちゃうと時間を忘れちゃいそうなので、涙をのんで我慢、我慢。

「台所は……うわつ、竈もコンロも無い……。料理もできないよ、これじゃ」

熱源として、庶民の家庭で一般的なのは、薪や炭を使う竈。

それが設置されていない代わりに、この家は錬金術師の家らしく、魔力で動くコンロが設置してあった……みたい。

今残っているのは、その痕跡の土台のみ。

「ま、しばらくは外食で済ますとして……。やった、お風呂発見！ さすが錬金術師！」  
 アルティマドポーション  
 錬成具や錬成薬を作る時に、身ぎれいにしていないとダメな物もあるので、錬金術師の

工房にはお風呂が付いていることが多いのだ。

もちろん、師匠のお店にもあったので、私も何度も使わせてもらっている。

私、お風呂は大好きだから、ポイント高いよ、これは！

でも、師匠の所みたいなのに、湯沸かしの錬成具を作らないと薪代がバカにならないので、当然私もそれを目指す。

じゃないと、とても毎日入れないからね。

「うわー、何かすっごくやる気が出てきたよ！ 最後は裏庭だね！」

私は気合いを入れ直すと、台所の奥にあった、裏庭へと続く扉を押し開いた。

——扉の向こうは原生林となっていた。……とまで言うと大げさか。

一応、ここは薬草畑のはずなのに、見た印象としてはただの藪。

家の周りを囲む柵は、申し訳程度にしか残っておらず、かなりの部分が腐って破損。

このままでは、すぐ後ろまで迫った森に裏庭が飲み込まれるのは、時間の問題だろう。

「井戸は大丈夫だね？」

扉を出てすぐ右手にある井戸の周囲は、石畳になっていてギリギリ藪から免れている。中にゴミが入ったりしないよう、きっちりと蓋はされているが、釣瓶などはないため、

水は汲めない。

「中は……ちゃんと水はある。濁れてはいない。釣瓶を買ってくれば使えるね」

よし、大体把握できたかな？

ひとまず必要な家具はベッドとテーブル、椅子。

雑貨類としては、食器と布団、釣瓶。これだけあれば生活はできる。

どこで買うべきかは……よし、早速エルズさんに頼ろう。

歩いて一分ほどのお隣へ向かい、声を掛ける。

「エルズさん、ちょっと良いですか？」

「はい、ちょっと待っておくれ。——あいよ、何か手伝いが必要かい？」

「えっと、手伝いというか、買い物が多すぎて。家具や雑貨類が欲しいんですけど、どこで買えば良いでしょうか？」

然程待つ事もなく出てきてくれたエルズさんに訊ねると、すぐに答えが返ってきた。

「そうだねえ、家具は大工、鍋釜なら鍛冶師のところに注文だね。ある程度は雑貨屋で買えるが、よく売れる物以外は街への注文だね」

ああ、小さい村だとそうだよねえ。

王都だとそのあたりは、まず困らないんだけど。

まあ、私は見るだけで、買うことは無かったけどねっ！

「やっぱりそうですか。場所を教えてもらっても良いですか？」

「そりゃかまわないが……」

エルズさんは少し考えて、ウンと一つ頷く。

「そうだね、アタシが案内してやるから、少し家に入って待つといておくれ」

「良いんですか？」

「小さい村だからね。あんたも顔つなぎしておいた方が良いだろう？ まかせな！」

「それは助かります！ ありがとうございます」

頼もしい笑みを浮かべて胸をドンと叩くエルズさんに、私は頭を下げてお礼を言う。

「良いってこと。ささっ、入んな！」

エルズさんに誘われるまま家に入り、出してくれた温かいお茶を頂く。

よく考えたら、村に着いて水の一杯も飲んでなかったなあ、と思い出し、ホッと一息ついていると、しばらくしてエルズさんが戻ってきた。

「よし、準備できたよ！ 行くかい？」

「あ、はい！ お願いします。お茶、ごちそうさまでした」

エルズさんの家を出て、案内されるまま、たどり着いたのは一軒の民家。

周りに木材が置かれ、作業場のような所はあるものの、何か看板が出ていたりはしない。

良かった。案内してもらわないと、これはちよつと声を掛けづらい。

「ゲベルク爺さん、いるかい？」

無遠慮に家に踏み込むエルズさんに続き、私も遠慮がちにその後を追う。

「なんじゃ、エルズか。仕事か？ ん？ 後ろの嬢ちゃんは初めて見る顔じゃな？」

奥から出てきたのはかなり高齢のお爺さん。

その割に、矍鑠とした動きであまり老いを感じさせない。

ちよつと鋭い視線と厳しそうな表情が如何にも頑固な職人風で、あんまりコミュニケーションが得意じゃない私としては、一人で話しかけるのはちよつと怖い感じ。

「こつちは、越してきたサラサちゃん。なんと、錬金術師様だよ！」

「おお、あの店かの？ それは助かるわい。それで、家の修理か？」

「あ、いえ、それもそのうち頼むかもしれませんが、今日は家具の方を」

絶対に無いと困るのはベッド。

野宿することを考えたら、床の上でも大丈夫だけど、さすがに自分の家でそれは悲しい。テーブルや椅子も欲しいけど、所持金のことを考えたら、とりあえずは保留かな？

「ベッドをお願いしますか？ できるだけ早く。作りさえしつかりしていれば、他は細

かいことは言いませんので」

「ふむ。寝るのに困るものな。そうさな、それなら値段は——」

少し考えて、口を開いたゲベルクさんの背中を、エルズさんがパシーンと叩いた。

「なんだい、爺さん！　可愛い嬢ちゃん、しかも錬金術師様が越してきてくれたつてのに、ベッドの一つや二つ、引っ越し祝いにくれてやったらどうだい！」

「あ、いえ、きちんと払いますよ……?」

「でも、サラサちゃん。新米な上に、こんな田舎に来るぐらいだ。あんまりお金、余裕が無いんじゃないのかい？」

「うっ……」

「それに、あの家、なーんにも家具が無かつただろう？」

「……そうか、あの家の家具、キリクの坊主が新宅を構えた時、軒並み持っていったんだつたな。よし、解った。ベッドはタダで作ってやる」

「えっ!?　あの、良いんですか?」

「エルズの言うとおり、孫よりも小さい子に引っ越し祝いもくれてやれねえようじゃ、男が廢る。余裕ができたなら、注文してくれりゃ良い」

「あ、ありがとうございます！」

正直なことを言えば、運転資金が心許ないから、非常に助かる。

怖そうなお爺さん改め、気前の良いお爺さんは片頬を上げて笑い、そんな彼に私は、お礼と共にぺこりと頭を下げた。

ゲベルクさんの下を辞し、次に案内されたのが鍛冶屋のジズドさんの所。

ここは予算の関係で、顔合わせのみ。注文はせずに次の目的地、雑貨屋へ。

「この村で店といえは、この雑貨屋だけだね。夫婦でやっている店なんだけど、買い付けなんかでよく留守にするから、娘のロレアが店番していることが多いんだよ」

そこは、他の民家の二倍ぐらいはありそうな大きな建物。

居住部分は他と変わらないと思うので、店舗スペースが家一軒分ぐらい?

私のお店は、店舗スペースを含めてもほぼ普通の民家と同じだから、負けてるね……。

「こんにちは」

ゲベルクさんの所などとは違い、きちんと看板が出ているので少しは入りやすい。

再びさつさと中に入るエルズさんに続き、私も挨拶しながら中に入ると、出迎えてくれたのは、たぶん私と同じくらいか、少し年下の女の子。

短めに切った髪の毛に、活発そうな表情で、笑顔が可愛い。

「いらつしやいませー。あ、エルズさん。こんにちは！ お買い物ですか？」

「いや、この娘の案内さ」

「サラサと言います。錬金術のお店を開店するので、今後ともよろしくお願いします」  
エルズさんに押し出されるようにして、私は前に出て自己紹介。

「あ、はい！ ロレアです。お願いします！ ……ほえー、都会っ子だあ」

「え？ 都会っ子？」

私のどこが？

周りに比べれば、私なんてイモですよ？

勉強に忙しかつたから、オシヤレに掛ける時間もお金も無かつたし。

「あ、いや、その…服とか、仕草とか、このへんの子とは違うし…？」

「そう、なの？」

確かにこの服は、先輩に連れられて行つた、王都のお店で買った物だけだ。

先輩たちは、あまりに無頓着な私を見かねたのか、時々連れ出してくれたんだよね。

私の懐具合を考えて、貴族の先輩たちは普段利用しないだろう古着屋でコーディネートしてくれる良い先輩だった。

仕草とかは……判るほど違うかな？

「いや、だって！ この村だと基本手作りだし、もう、着られたらいいや、みたいなのが多いから！」

「え？ でも、ロレアさんの服は、王都でも違和感ないと思う、わよ？」

むしろ、ちよつとオシヤレな部類に入ると思う。

王都にも『着られれば良い』という人は一杯いるからね、私みたいに。

「王都！ 王・都！ すごい、超・都会だ！ ね、ね、時間があるときで良いから、お話を聞かせてください！」

「う、うん……」

キラキラした瞳で詰め寄ってくる彼女に若干気圧されながら、私は頷く。

都会……いや、まあ、この村と比べたらそうなるけど、そこまで懂れること？

王都でも貧乏な人は貧乏で襦袢を着ているし、華やかじゃない所の方が多いんだけど、それをそのまま話しちゃっても良いのかな？

「ほらほら、ロレア、仕事しな。サラサちゃんは買い物に来ただから」

「あ、うん。そうだね！ 何が必要？ 私頑張って勉強しちゃいます！ ……許されている範囲内で」

「えっと、良いんですか？」

「うん、そんなには値引きできないけど、ちよつとしたおまけぐらいなら？」  
 「ありがとうございます。なら、大きめのタライと布団、あと食料品をいくつかお願いしますか？」

「タライはこのあたりですね。木製の方が少し安いですよ」

そう言つて指さしたところには、一抱えほどのタライが何種類か積んである。

金属板を加工して作った物と木製の物。どちらも出来は悪くない。

これらをゲベルクさんとジズドさんが作ったのなら、腕の心配はなさそうだね。

「布団は置いてないから、受注生産……つて言つても、近所のおばさんたちが作るだけだから、できるなら自分で作つても良いかも。材料は売つてるから」

なるほど。こういった村だと基本は自分で作るのかな？

ちなみに私も作れます。

学校の寮に入るとき、孤児院の先生と一緒に作ったので。

布団を作つたのはその一回だけだけど、裁縫自体は得意なので自分で作ろうかな？

理由は解るよね？ 色々と、限界まで補修して使つてたからだよ。

「食料品は——普段の食事だよな？ 採集者向けの保存食はそれなりに充実してるけど、それ以外は穀物ぐらいかなあ？ ここだと作っている人に直接もらいに行くから。売買の

仲介はできるけど……」

「ああ、それはアタシがやるよ。サラサちゃんもこの街に住むんだから、顔繋いでおいた方が良いでしょう？」

あ、このへんは田舎っばい。

王都だと食料品はお店で買う物で、生産者に直接交渉なんてやらないから。

何で店に置いてないのかと訊いてみると、売れるか解らないのに収穫してしまつと、畑に置いておくよりも日持ちがしないためだつて。

頼んだら必要な量を収穫してきて、分けてくれるらしい。

「そうですね。時間がある時で構いませんので、お願いします」

まだ、料理できる状態じゃないしね。

他の商品も色々と見せてもらい、最終的に私が購入したのは木製のタライと釣瓶、布団用に布と綿を余裕を見て多めに、それに食器類を少々。

ただ、持ち歩くのは大変なので、一先ずは取り置いてもらい、帰りに寄ることにする。

「さて、これで大丈夫、なはず」

「ま、何か買ひ忘れたがあればいつでも来てよ！ 夜中じゃ無ければいつでも対応するから！」

おおお、さすがは田舎。

王都だと時間を過ぎたら対応してくれないよ？

「ありがとうございます。困ったときにはお願いしますね」

笑顔で手を振ってくれるロレアさんに別れを告げ、次に向かったのは食堂。

ウチの台所は料理を作れる状態じゃないので、これを知らないといじめちゃう。

「この村には一軒しか無いが、それなりに美味いから期待しな！」

「はい！ あ、エルズさんも一緒に昼、どうです？ 案内のお礼に奢りますよ？」

そろそろ昼食の時間だし、お世話になったらお礼は必要、と誘ってみたのだが、エルズさんは何々と笑って私の背中をバシバシと叩いてきた。

うん、痛いです。

「はっはっは、娘ぐらいの歳のサラサちゃんに奢られると、おばちゃん、体裁が悪いよ！  
むしろおばちゃんが奢ってあげるね！」

「え!? そんな、案内してもらった上に、そこまでしてもらうわけには……」

「若い子がそんなこと気にするんじゃないよ！ おばちゃん、太っ腹だから！」

そう言つて、ポンとお腹を叩くエルズさん。

確かにちよつと太……いやいや、もちろん比喩表現ですよ？ ええ。

エルズさんに案内されたのは、宿屋兼、食堂になっているお店だった。

こんな村には不釣り合いなほど大きいのは、採集者が多く集まっている証拠だろうか。  
中に入ると、食堂で数組の採集者らしき人たちが食事をしている。

今の時間帯なら大樹海に入っている人たちもいるだろうし、これなら私の商売もそれなりに安泰かも？

「ディラル、食べに来たよ！」

「おや、エルズ？ 昼間から来るのは珍しいね？」

エルズさんの声に答えて、奥から顔を出したのはエルズさんと同年代のおばさん。

ニコニコと快活そうで、体格もエルズさん以上に福々しい。

「ディラル、止めとくれよ。まるでアタシが夜になると飲んだくれてるみたいじゃないか！」

「エルズには稼がせてもらって、頭が上がりませんね」

あつはつは、と笑いながら互いの肩をバシバシと叩き合うエルズさんとディラルさん。

うーむ、この村のおばさんたちのコミュニケーションなんだろうか？ あのバシバシは。華奢な私には結構キツいんだけど。

「それでどうしたい？ さすがに昼間っから酒を呑みに来たわけじゃないんだろ？ 後ろのお嬢さんが関係してるのかい？」

「ああ。このお嬢ちゃんは錬金術師様さね！ この娘の紹介と昼食に来たんだよ」

「あ、あの、サラサと言います。この村でお店を開きますので、よろしくお願いします！」  
そう言われてエルズさんに前に押し出された私は、慌てて挨拶をして頭を下げた。

「へえ、その若さで店を構えるのかい!? スゴいねえ。あたしや、この宿の女将でデイルってんだ。良かったら鼻屑ひびにしておくれ！」

「はい、今、ウチは料理できる状態じゃないので、しばらくはお世話になると思います」

「ああ、引っ越し直後はどうしてもねえ……よし解った！ お嬢さんの引っ越し祝いだ！ 今日はおばさんが奢ちかつてやるよ！」

「あ、ありがとうございます」

正直奢りは嬉しいけど、バシバシと叩かれる背中が痛い。

「おや、デイラル、悪いねえ」

「エルズ、アンタはちゃんと払いなよ！」

「なんだい、けち臭いねえ。ここは気前よく奢る場面じゃないのかい？」

「あの、やっぱり案内のお札に私が……」

「ほら、こんなお嬢ちゃんに気を遣わせて」

私が遠慮がちに申し出ると、エルズさんがニヤニヤと笑いながら、私を示してそんなことを言う。

それを見て、デイラルさんが舌打ちをした。

「ちっ、仕方ないねえ。アンタもタダでいいさね」

「えっと、大丈夫ですか？」

感謝はしても、出汁だしにされるのはちよつと困るんですけど……。

私が少し困った顔で二人の顔を窺うと、エルズさんたちは顔を見合わせ、揃そろって笑い声を上げる。

「気にするこたないよ。エルズとは幼馴染みでねえ。あたしらはいつもこんなもんさ。それに、エルズの旦那には世話になってるんだ。たまに奢るぐらい、どうって事ないよ！」

「アタシたちのこれは、じゃれ合いみたいもんさ。悪いね、気を遣わせちゃまって」

「いえ、それなら良いんですが」

エルズさんの旦那さんは獵師で、この宿にも肉類を卸おろしているらしい。

その時、オマケしてあげることもあり、互いに持ちつ持たれつの関係で、この程度の言い合いは気の置けない仲のコミュニケーションみたいなもの、なんだとか。

うーん、解らない！

やっぱり人付き合いに慣れてないからかなあ？

「お嬢ちゃんは何か苦手な物はあるかい？」

「いいえ、特には。……今まで食べたことのある物に關してはですが」

贅沢ぜいたくを言えるような環境かんきやうでは育つてないので、好き嫌いきらいはともかくとして、食べられない物は無い。

話に聞く限り、世の中にはとんでもなく臭い物やら、腐くさっているのに食べられる物やらもあるみたいだから、そんな物が出てくるとちよつと不安だけだね。

「なら大丈夫だ。ここは採集者を相手にしてるからね。出す料理には一般的な食材じふたんしか使つてないさ！」

なるほど、それなら……ん？ 出す料理には？

「この村、何か変わった郷土料理があるんですか？」

「ん？ 郷土料理ってほどの物じゃないね。田舎いなかだと結構食べられるものさ。昆虫こんちゆうや芋虫いもむし、場合によっては毛虫を食べたりも……」

うげつ！ それは無理っ！

死にかけレベルで飢えてないと！

「あつはつはつは。心配しなくても、ウチじゃ出してないし、村人でも食べるのは一部の物好きさね！」

「そ、そうなんですか……」

良かった。

料理を食べたあとで『実は入ってた』とか知らされると、下手したら口からオトメ汁じるを出してしまうかもしれないからねっ。

「でも、アレなんかは人を選ぶんじゃないかい？ ほら、漬物つけものの」

「ああ、アレかい。好きな人は好きだから出しちやいるが、頼まれたときだけだからねえ」

「——？」

やや不穏ふおんな会話に不安になり、詳しく訊いてみると、エルザさんの言った「漬物」とは、一年以上の長期にわたって樽たるに漬け込んだ、ちよつと特殊とくしゆな漬物らしい。

不作時の非常食として作られているのだが、この村の人でもそのまま食べるのは厳しい代物しろもので、普通の人はしばらく水に晒さらしてから食べる。

しかし、その酸味すいみと臭においがクセになる人もいて、そのまま食べる強者つよものも中にはいるとか。エルザさんもデイルさんも『全くお薦めできないし、私たちも食べない』というレベルだから、私が食べる機会はきつと来ないだろう。

むしろ来ないでください。

「ま、普通のオススメ料理を持ってくるさ。ちよいと待っとくれ！」

そう言つて厨房へと下がったデイラルさんは、二人分の料理を手に、すぐに戻つてくる。「ウチの昼は大体こんな感じだね。今日は奢りだけど、普段はこれで四〇レア。気に入らたら鼻屑にしておくれ！」

「ありがとうございます。ごちそうになります」

並べられたのは、肉の細切れと豆を一緒に炒めた物、パンが二つ、それにお野菜たっぷりのスープ。

良い匂いが漂つてきて……うん、美味しい！

ここしばらくは旅の空で、塩辛い干し肉と堅いパン、それに水だけだったから、温かいだけでもかなり嬉しい。

「気に入ったようだね？」

「はい！ 美味しいです！」

「そいつは良かった！ ゆっくりしていっとくれ」

デイラルさんは再び私の肩をパンパンと叩き、何々と笑い声を上げて仕事に戻る。

うん、いい人なんだけど、激しいボディタッチはちよつと控えて欲しいかな？

私、勉強しかしてこなかった、もやしっ子だから。

「すまないね、がさつな女で。こんな村には、お嬢ちゃんみたいな細っこい娘はいないから、接し方が解らないのさ。村の女は子供の頃からたくましいのばっかだから」

あ、顔に出ちゃったかな？

「いえいえ。良い人なのは解りますから。——エルズさんはここによく来るんですか？」

「ん？ 昼間はたまに来る程度かね。ウチは亭主が獵師だからね。昼は一人なのさ」

「あの、お子さんは？」

「娘が二人、息子が一人いるよ。娘は普通に嫁いだんだが、息子の方は亭主のあとを継ぐのは嫌だ、商人になるつて村を出て行っちゃったねえ……」

「そう、なんですか……」

こ、こういうとき、なんて返せば良いの!?

人生経験の少ない私では、言葉が出ないよ！

「ああ、気にするこたないよ。普通に元気にやってるし、たまにはこの村にも商売で来るからね。それなりに上手くやってるんじゃないかい」

良かった。

ちよつと遠い目をしてたから、てつきり音信不通とか、そういう事を想像しちやつた。

「さて、小さい村だから主などとは回つちまつたが……昼を食べ終わつたら、村長にも紹介しておこうかね」

「あつ！ 必要ですよね！ ご挨拶。王都じゃそういうの無かつたので……」

「あつはつは、そりゃそうだ！ 王都のてっぺんは王様じゃないか。挨拶に行くわけないねえ！」

おかしそうに笑うエルズさんに、私も苦笑を返す。

王都だと引つ越してきて挨拶するにしても、せいぜい隣近所くらい。

だから、すっかり頭から抜け落ちていた。

王国の法で引つ越しは自由に認められてるけど、こういう村で上役の心証を害すると生活していけるわけない。

危なかつた！ 文字通り村八分にされるところだったよつ！

エルズさん、ありがとう！

「あの、村長さんってどんな人ですか？」

気難しい人だつたりしたら、人付き合い経験値が少ない私にとっては、強敵である。

「んー、もう結構な歳の爺さまだねえ。ちよいとヨボヨボしちやいるが、まだまだくたば

りそうにはないよ」

「……怖い人ですか？」

「え？ ああ、大丈夫さ！ のんびりした爺さまだから」

「そ、そうですか！」

良かった！ サラサちゃん、大勝利！

いやー、この村に来た時にはちよつと絶望しかかつたけど、結構良い村じゃない？

エルズさんの紹介のおかげかもしれないけど、口下手な私にみんな優しいし。

暮らしやすいのが一番だよね！

「ほら、あそこが村長の家さ」

エルズさんが指さす先にあるのは、特別広くもない、ごく普通の民家。

場所的には村の中心付近だけど、言われないと村長の家とは気付かないね、これは。

「この村だと、税の徴収ぐらいいしか仕事がないから、サラサちゃんにはあんまり縁がないと思うけどね」

「そうかもしれませんね」

村長のお仕事は村の税金を集めて、徴税官に引き渡す事。

でも、錬金術師はちよつと違って、売り上げに応じた額を自分で納めないといけない。

まあ、自己申告なので、ある程度はごまかせるんだけど、もちろんそれは犯罪。錬金術師ぐらい稼げるなら、普通はやらない。

ただし、師匠には『記録するのが面倒。増税しても良いから楽にしろ』と不評だった。「ま、腐っても村長だ。顔は広いから、困った時にちょっとは役に立つさね。挨拶しておいて損は無いさ」

「はあ……」

そんな適当な感じで良いんだ？

「おいおい、エルズ。そんな言い方は酷いんじゃないかのう」

そんな話をしながら村長の家の前まで来たところ、家の裏から出てきたお爺さんがそんなことを言いながら近づいてきた。

つてことは、この人が村長？

「おや、爺さま、聞いていたのかい」

聞かれたらマズいんじゃないや、と思った私に対し、エルズさんは悪びれる様子もなく、あっさりと言葉を返した。

「昔は可愛かったエルズちゃんが、こんなになってしもうて……」

「『ちゃん』とか言うんじゃないよ！ これだから爺さまは。こちら、あの店に越してき

た錬金術師のサラサちゃんだよ」

「初めまして。錬金術師のサラサと申します。これからこの村で暮らしていきますので、よろしくお願いします」

エルズさんに紹介され、私が慌ててぺこりと頭を下げると、村長は気安げに手を振った。

「ほつほつほ。そう畏まることはない。錬金術師は超えりーと、じゃからのう。ウチの村に来てくれただけでも大歓迎じゃよ」

「いえ、そんな……私なんてまだまだ若輩者で……」

「いやいや、錬金術師というだけでウチの村としては十分助かるんじゃないや。こちらこそよろしく頼むわい。必要なことがあったら何でも手助けするから、気軽に相談してくれ」

「はい、ありがとうございます」

少しだけさだけど、村長の言うことはそう間違っではない。

医者のない小さな村では、錬金術師の有無は死活問題だったりするのだ。

どんな初心者の錬金術師でも、ある程度の錬成薬は作れるし、医学的知識もある。むしろ、そのへんの医者よりも、錬金術師の方が信用があるくらい。

まあ、だからといって傲慢になったりしたら村八分必至。

なので私は、謙虚に行きますよ、そう、謙虚にね。



「さて！ やることは多いし、サクサク片づけないとね！」

暇ひまそうな村長の雑談から逃のがれた私は、旅の間に溜たまった洗濯物せんたくものをまとめて桶おけに放ほうり込み、魔法まほうで出した水みづでちやちやっとな洗濯せんたくしていた。

——うん、実は生活するだけなら、井戸いどを使わなくても結構けっこうなんとなかなるんだよね。

なら、なんで釣つる瓶びんが必要ひつようかと言いえば、錬金術れんきんじゆつや薬草くすりくさの栽培さいばいに使う水みづ、錬成薬れんせいやくを使った治療りょうに使う水みづなど、魔法まほうで出した水みづは望ぼんましくない事こともあるのだ。

決して魔法まほうは万能ばんのうでは無い。でも、洗濯せんたくには有用ゆうよう。

洗い終わった洗濯物せんたくものの乾燥かんぞうも魔法まほうで終わおらせ、次つぎはお掃除そうじ。これも魔法まほうを活用かっくつ。

家中うちうちの窓まどを開ひらけ放はなち、棚たなの上に溜ほまった埃ほこりを風系統ふうけいけうの初等魔法しよとうまほうの『微風フェリス』——別名お掃除魔法そうじまほうで吹き飛ばふかしていく。

「後は軽く拭ふき掃除そうじをすれば……あ、雑巾ぞうきんが無い」

寮りやうで使つかった雑巾ぞうきんはさすがに捨すててきたし、さつき買った布団用ふだんようの布ぬいを使うもちるのは勿体もったいなさすぎる。リュックの中に何かあつたかな……？

「これはまだ着られる。こつちは綺麗きれいだから何かに使えるかも。となると、これ、かな？」  
選んだのは、普段ふだん着るにはサイズ的にちよつと厳きびしくなつてしまった服。

そういった服ふくは古着屋こちゃうやに売かつたり、他の布製品ふしせいひんを作つくつたり、生地きじがへたつていたら雑巾ぞうきんにしたりするのだが、この服ふくはちよつと思おもい出深いくて残のこしていたのだ。

あれはそう、私の、学校がっこうへの入学にゅうがくが決きまり、寮りやうへ引ひつ越こししようとしていた時の事。

入寮にゅうりやうの日ひだからとちよつと良い服いいふくを着きていた私わたしに、院長先生げんちやうせんせいが言い放はなつた言葉ことば。

『ちよつと服ふくが見窄みぢらしいわね。ハレの日ひなんだから、少し良い服いいふくにしたら？』

院長先生げんちやうせんせいとしては、奨学金しょうがくきんで孤兒院こじいん時代じだいとは別の服ふくを揃そろえていると思おもつていただけで、まったく悪気あくきなく言いつた言葉ことば。でも、私わたしにとっては一張羅いちぢやうら。

とはいえ、さすがに見窄みぢらしく見える服ふくで学校がっこうに入るはいるのは憚はばられたので、急遽きゅうきょ院長先生げんちやうせんせいに付き合あつてもらつて、頑張がんぢやうつて揃そろえた服ふくの一つが、この雑巾ぞうきん候補こうほ。

その時は、どうせすぐに大きくなるからと、少しだけ大きめの服ふくを買かつただけど……。

「少し前まへまでこの服ふく、着きてたよね、私……」

いやいや、さすがに今は小さくて、もう着きられないよ？

——一〇歳の時ときに買かつた服ふくだもの！

かなり草臥くたひれているし、とても外ぐわいには着きていけない。

その代わり、寝間着代わりなら何とか——とは思っていない。決して。大丈夫、きちんと成長してる。

同年代の平均ぐらいはきつとある……はず？

——そういえば、ロレアさんの年を聞かなかったけど、何歳なんだろう？

彼女に比べると私の方が少しだけ発育が悪いけど……少し、少しだけね！

「錬成薬に成長しやすくなる薬とかあったかな？ ……使うかどうかは別にして」

などと、益体も無い事を考えながら、私はササッと拭き掃除を終わらせると、早々に毛布にくるまり、新居での初日を終えたのだった。



「う〜ん、久しぶりによく寝た！」

翌朝、目を覚ました私は思いつきり伸びをして、ふっと力を抜いた。

久しぶりに安全な場所でごっすり寝たから、寝床が床でも、気分的にはすつきり。

二ヶ所ある窓から差し込む日差しも、明るくて気持ち良い……。

「ただ、改めて見ると……この部屋、殺風景だよな」

これまで暮らしていた寮の部屋に比べて二倍以上広い部屋。

そこに家具の一つも無いのだから、その面積以上に広く感じる。

そんな部屋の片隅で毛布にくるまって寝ている私。なんとも微妙な絵面である。

正直、すごく殺風景——いやいや、これは殺風景じゃない。

アレンジする余地があるのだ。うん、そう。せっかく買った家なのだから！

孤児院の部屋は共同部屋だったし、寮の部屋ではそんな余裕も無かった。

でも、ここなら自分の好きなようにコーディネートができるのだ、お金の許す限り。

そう考えれば、何も無いのも悪くないよね？

「さて、それはそれとして。今日はいよいよ工房だよ！ むふふふ……」

昨日は入るのを我慢した、自分だけの工房！

この素敵な響き、錬金術師ならきつと共感してくれるよね？

ついつい、口から笑い声がこぼれてしまう。

逸る心を抑え、朝食代わりに昨日の夕食の残りを詰め込むと、工房の扉の前に立つ。

「いびっ！」

扉を開けて中に踏み込み、明かりを灯す。

「——おおお〜、くふっ、くふふふっ」

おっと。人に聞かれるとまずい感じの声が出てしまった。  
でも、仕方ないよ！

スゴいんだもの、この工房！！

まずは錬金釜。

これが無いと大半の錬金術は行えないぐらいに重要な道具。

もしかしたら付属していない可能性も考えていたのだが、きちんとある上に、そのサイズは私が中に入れそうなほどに大きい。

私が師匠から贈られた錬金術セット（庶民には買えない高級品）に含まれる錬金釜が片手鍋サイズと言えば、どのくらい凄いか解ってもらえるかな？

次にガラス炉。

メインの用途は錬成薬用の薬瓶を作るための使うものだが、これの有無は結構重要。

錬成薬の種類によって瓶に使うガラスにも調整が必要だったりするので、他所から瓶を仕入れるとなると、結構面倒なのだ。

他にも細々とした道具に加え、各種素材も置かれていて、他の部屋がスツカラカンだった事に比べてあまりにも充実しているのが不思議なほど——というか、滅茶苦茶不思議。さすがに師匠の工房ほどじゃないけど、学校出たての錬金術師が使うにはかなり贅沢な



工房で、これを揃えるために必要な額を考えると目眩がしそう。

「この家、一万レアだったんだけど……」

当たり前だが、鍊金釜一つとっても到底一万レアで買えるような物ではない。

それどころか、残っている素材の一部を売るだけで軽く一万レアを超えるだろう。

「実は、すごいお得だったのかも？ ……いや、間違いないお得だよ」

家の外観にはガツクリきたけど、前に使っていたのは、かなり高位の鍊金術師だったんじゃないかな？ お爺さんらしいけど、どんな人だったんだろう？

鍊金術師だからこの部屋の価値が解つてないとは思えない。

……まさか、すごい瑕疵物件ということはないよね？

王都でも、凄惨な事件の現場となつて怨霊が取り憑いたりすると、めちゃくちゃ安くなつたりするんだけど……それならエルズさんのあの態度はないか。

気にはなるけど、学校が仲介するんだから、そう変な物件じゃないはず。

うん、そう思う。じゃないと、気になって生活できないし。

「この掃除は……そんなに必要なさそうだね」

工房だけに、『清掃』の効果も強くしてあるのか、他の部屋に比べても汚れが少ない。

「あ、そうだ！ 鍊金術大全を並べないと！」

工房の片隅には、まさに並べてくださいと言わんばかりに本棚が置いてある。というか、たぶん並べてたんだろうね、鍊金術師だもの！

私は早速、リユックを取ってきて、そこに一冊ずつ鍊金術大全を収めていく。

更に師匠から貰った新品の道具も綺麗に並べれば、それだけでも美しい。

「ふふふ……これこそ、まさに鍊金術師の工房！ 最・高！」

変人と言うなかれ！

やや変則的だったけど、自分のお店と工房を持つのは鍊金術師にとって一つの到達点。

嬉しいのはしょうがないのだ！

含み笑いどころか、高笑いしたいぐらい、私は今、ハイになっている！

「うふふふ、最初は何を作ろうかな〜♪」

足取りも軽く工房の中を歩き回り、道具を一つ一つ手に取って眺める。

こういう状況だと、すぐに使ってみたくなる。

当然だよな？

かといつて、簡単な鍊成薬を作るのはちよつと……。

「う〜ん……、あ！ あれなら今の状況にちょうど良いね！」

私は自室に駆け戻り、昨日買った布を持ってくると、それを鍊金釜にまとめて突っ込む。

かなり余裕を持って買った大量の布も、この錬金釜なら一度に入る。さすがに師匠から貰った錬金釜だと、この作業には無理があるので、この工房で最初に作るには、きつとふさわしい。

「あとは……」

以前作った時のことを思い出し、錬金釜の中に水といくつかの素材を入れて薬液を作り、魔力炉まろろに火を入れてかき混ぜながら熱していく。

「火」と言っても実際に薪まきに火を付けて錬金釜を熱するわけではなく、魔力を注ぐだけなのだが、錬金釜のサイズに比例して、魔力炉の消費する魔力もまた大きい。

「これは……大きい錬金釜が一般的でない理由が分かるね」

魔力が多い私でも結構疲れるのだから、半数ぐらいの錬金術師からすれば、このサイズの錬金釜を使うのは、厳しいんじゃないかなあ？

ゴリゴリと魔力を消費しつつ、そのまま三〇分ほど煮詰めたら、魔力炉の火を落とし、その上から錬金釜を下ろし……下ろし……下ろし……下ろし……

「しまった、重すぎて下ろせない……」

水をなみなみと灌たえた錬金釜の重さは想像以上だった。

——いや、想像不足だった、だね。

私がつつぱりと入るような金属製の釜かま、それに水をたっぷり入れれば、その重量が百キロを優に超えるのは当然の事。普通に持てるはずが無い。

「仕方ない。少し苦手なだけ……」

私はゆっくりと呼吸を整え、魔力を体中めだに巡らせていく。

その状態で気合いを入れ、釜を持ち上げる！

「ふんっぬ！！！」

おっと、はしたない。

女の子としてダメな感じの声が出ってしまった。

そのまま、よたよたと流しまで運ぶと一気にひっくり返して釜を空にする。

「ふううう〜」

大きく息を吐いて、身体強化を解除する。

わずかな時間でも、結構疲れる。身体強化は、あんまり得意じゃないから。

——いやいや、仕方ないんだよ。私、貧弱だからね。

少し力を強くするだけなら、そこまで疲れなくても、私の筋力で数百キロを持ち上げるとなれば、その強化幅はばは膨大ぼうだい。かなり高度な魔力操作が必要となる。

師匠なんかは『護身にも便利だぞ。頑張っがんばって身につける』と言いながら、息をするよう

に使ってたけど、普通は無理。

体格的にも慣れておかないと、色々マズいとは思っているんだけどね。

錬金素材の下処理をするにも筋力は必要だったりするし……。

「ま、おいおいだね！　とりあえずはこちらの処理をしないと」

流しに残った布に水を掛けながら綺麗に洗っていくと、最初は茶色っぽかった布が、だんだんと綺麗な空色に変わっていく。

「うん！　良い色！　思った通り！」

私がやったのは単純な染色、ではもちろん無い。

私は染め物屋ではなく、錬金術師なんだから。

これは一般的に「環境調節布」と呼ばれる、温度・湿度調節の付加を行った布。

人にとって快適になるように調整してあるので、これで寝具を作れば心地よい眠りが約束されるのだ！

ちなみに、色は私の趣味。コストは掛かるけど、何の手も加えない環境調節布って、ちよつと薄汚れたような茶色で、微妙なんだよね。

せつかくの自分の部屋、そんなお布団は使いたくない。

ごしごしと薬液を流し終わったら、次は天日干し。

見た目も綺麗な布なので、これはお店の前に干してしまおう。

立木の間に張り巡らせた紐に布を掛けていけば、涼やかな空色が風にはためき、とつても良い。今日も良い天気なので、数時間もすれば乾くだろう。

思った以上に好みの色に染めることができた歓びに、私がウンウンと頷いていると、道の方からガラガラという荷車の音が聞こえてきた。

「なんじゃ、随分綺麗な布じゃの」

「あ、ゲベルクさん」

振り返ると、荷車を引いたゲベルクさんが立っていた。

その荷車にはベッドらしき物があるんだけど、なんかバラバラなような……？

「それ、ベッド、ですか？」

「ああ。ベッドができたから持ってきたぞ」

「そうなんですか？　でも、なんか形が……」

「まだ組み立ててないからな。搬入しにくいだろう？　どこに置けばいい？」

「あ、そうですね！　二階にお願いします」

でっかい部品——たぶん寝る部分の板を担いだゲベルクさんを案内して中に入る。

そのまま二階の部屋に移動して、ベッドを置いて欲しい場所を示すと、ゲベルクさんは

私が手伝う間もなく部品を運んでしまい、数分ほどでベッドを組み上げてしまった。試しに腰を下ろしてみると、しっかりと作られていてガタつきもまったくない。

「ごく普通のベッドだから問題ないとは思いますが、不備があつたら連絡してくれ」

「いえいえ！ 急いで作ってもらったのに、王都でも十分に通用する出来ですよ！ ありがとうございます」

「ふん、急ぎでも手は抜かねえよ。ついでにコイツはおまけだ。椅子も無しに店番もできねえだろう？」

そう言いながら、店舗スペースにボンボンと置いてくれたのは、二脚の椅子。背もたれも無いシンプルな物だけど、有ると無しでは大違い。

大変ありがたいけど……。

「よろしいのですか？」

「かまいやしないわい。簡単な物だ。子供が遠慮すんな」

さすがにこれ以上タダで貰うのは、と遠慮しようとした私に、ゲベルクさんはそう言うのと、軽く手を振ってさっさと帰ってしまった。

見てみれば、簡単な物と言いつつも、ベッド共々、丁寧な面取りとヤスリ掛けがされている。素材も優しい手触りの無垢の木で、明るい地肌にオイルが塗り込まれた代物。

間違っても適当に作った物ではなく、素朴ながらも温かみがある。

「うーん、正にプロ。年季の入った職人の手仕事。私も見習わないと！」

と、その時、私のお腹が「きゆるるる」と抗議の音を鳴らした。

「あー、もうお昼か。朝から熱中してたから……」

自分の工房が嬉しくて、ちよつと時間を忘れていた。

「ご飯食へに行きたいけど……環境調節布は、大丈夫かなあ？」

見た目、ただの水色の布でも、その実、環境調節布はかなり高い代物だけに、放置するのはちよつと心配。

「ううーん、どうしよう？ 取り込んで行くべき？ でも、まだ乾いてないし……」

「サラサさーん、こんにちは〜」

私が悩んでいると聞こえてきた声、それは雑貨屋のロレアさんだった。

「あれ？ どうしたの、ロレアさん」

「えっと、引っ越して来られたばかりだから、何かお手伝いできないかと思って」

「わ、それは助かります！」

ちよつと良い見張り要員、来た！

いやー、人情が身にしみるね！

昨日初めて会ったのに手伝いに来てくれるとか、ロレアさん、いい人！

「そうだ！ ロレアさんはお昼、済ませました？」

「あ、いえ、まだです。お母さんたちが帰ってきて、すぐ飛び出して来ちゃったので……」

そう言っただけで恥づかしそうにするロレアさんだけど、私にとっては好都合。

「お昼、ごちそうするから、ちよつとこれを見てくれませんか？」

そう言って干したままの布を指さすと、ロレアさんは頷いた後、ちよつと首をかしげた。

「それは構わないんですけど、これって昨日買われた布、ですか？」

「うん、そう。ちよつと染めてみたんだ。結構良い色でしょ？」

「はい！ すごく！ サラサさんは染色もできるんですか？」

眩しいくらい笑顔で言われ、私はちよつと苦笑して応える。

「これも一応錬金術なんだけどね。お昼を買ってくるから、ちよつと待ってて！」

私はロレアさんにその場を任せ、ディラルさんの食堂へと駆け出す。

そして数十分後、私が食堂からお持ち帰り用ランチを手に戻ってくると、ロレアさんは律儀に玄関先に座って待っていた。

「あー、ごめんね。入ってもらえば良かったね」

「あ、いえ、大丈夫ですよ。今日は良い天気ですし」

「そう？ ま、少し早いけど、お昼にしようか。天気も良いし、ここでいい？」

そう言っただけで、私がランチを軽く持ち上げると、ロレアさんは笑って頷いてくれた。

私は部屋から敷物を持つてくると、玄関前に敷き、昨日買ったばかりのカップに井戸から汲んできた水を注いで置く。

カップが必要な来客なんてないかも？ と思いつつも、食器を二人分買っておいた私、グツジョブ。お茶もヤカンもないから、本当にただの水でしかないけど。

「ごめんね、単なるお水で。まだ鍋すら無くて……」

「あ、いえいえ、私の所も普通はお水ですし。この辺りのお水は美味しいですから。この家、井戸があるんですね？ ウチは共同井戸だから、水汲みが面倒で」

「錬金術には水が必要だからね。この村で井戸を持っているのは、宿屋さんや鍛冶屋さんの所、

他数軒ほどですね」

すぐ側の大樹海があるため水自体は豊富みたいだが、コストの関係で各家が井戸を掘れるほどの余裕は無いらしい。

井戸が掘れる事も無いから、無理に増やす必要性も無いのだろう。

「この辺じゃ、あまりお茶は飲まないの?」

「いえ、そのあたりは好みとお金次第ですね。ここだと、森で採れるスヤという木の葉っぱを使った茶がよく飲まれていますけど、それを好まない人は買う事になるので」

「エルズさんここで出してくれたのがそれかな? ロレアさんはあんまり好きじゃない?」

「いえ、私はどちらでも。ただ、母があまり好きじゃないみたいで」

「なるほどね」

食卓しよくたくに上る物は、どうしても食事を作る人の意向が反映されるよね。

ちなみに、私は白湯さきゆが基本である。

王都でお茶は買う物だったし、お値段の方も嗜好品しこうひんだけあって安くはなかった。

ただ、師匠ししやうのお店では出してくれたので、良いお茶が美味しいのは知っている。

なので、安物のお茶はあまり飲む気がしない。

どうしても美味しいお茶と比較ひかくしてしまうから。

でも、全く別のお茶なら飲んでみるのも良いかな?

それはそれで楽しめそうだし、何よりタダというのが良い。

「それにしても、この布、綺麗ですね。この辺りではこんなに鮮やかな色の布は滅多めつたに見かけませんよ。ウチでも高いから仕入れないし」

「そうだね、普通の染色ふつうのしよんしきだと、鮮やかな色に染めるのは難しいからねえ。……そうだ!」

この後、私はお布団を作るんだけど、手伝ってくれない? そうすればロレアさんにもこの布、分けてあげるよ? 結構たくさん染めちゃったし」

「良いんですか!? あ、でも、私、布を縫うくらいしかできませんけど」

私の言葉に喜色きしきを浮かべたロレアさんだったけど、すぐに困ったような表情になる。でも問題は無い。布団作りの大半は真っ直ぐ縫うだけだからね。

「大丈夫、大丈夫。布を真っ直ぐ縫えればオッケーだよ!」

私はこの村の流儀なづかに倣なまい、ロレアさんの背中をポンポンと叩たたいた。

お布団作りを簡単に言えば、布で袋ふくろを作つて綿を詰めつめる。それだけ。

でも、この綿を詰める作業が、結構難しいのだ。

綿を綺麗にお布団の形に整え、それを袋の中にぎゅぎゅっと押し込んで、ズレないように縫い止めていく。これにコツがある。

「へえ、お布団つてこうやって作るんですね……」

「ロレアさん、見るのは初めて?」

「はい。恥ずかしながら、ウチはこんなに綿の入ったお布団、使ってませんし……」

「あー、そっか」

綿って案外高いから、余裕がないと綿がたっぷり入ったお布団ふとんって作れないんだった。私も孤児院こじいんではベラッペラなお布団に毛布で、身を寄せ合って寝ていたし。

寮りょうに入るときにお布団を作ったのも、奨学金しょうがくを貰もらえた事と、孤児院の先生に『良い学校に入るんだから、恥ちずかしい物を揃そろえないと!』と言われたからだし。

まあ、『恥ちずかしい』とか『恥ちずかしい』とか以前に、学校生活の五年間、私の部屋おとずを訪れる人なんていなかったんだだけね。ふふっ……。

敷き布団と掛け布団かかけを作ったあとは、シーツとカバー。

こちらは縫うだけなので、二人でおしゃべりしながらひたすら縫う。

『布を縫うくらいしかできない』と言っていたロレアさんの手際は非常に良く、はつきり言いって私以上。得意だと思おもっていた私のお裁縫ざいほうスキルも、所詮まよ人並みだったのか……。

でも、そのおかげもあって、夕方には綺麗なお布団セットが一組、完成したのだった。

「ありがとー! これで今日は気持ちよく寝られるよ!」

私はバンザイして、ロレアさんに抱だきつく。

正直、一日で終わるとは思おもってなかったから、今日も毛布にくるまって寝るのを覚悟かくごしていたんだけど、予想外。

本当、ロレアさん、様々。

「いいえ、お手伝いに来たんですからこのくらい当然当然です」

私に抱きつかれて少し恥ちずかしそうにしながら、そうは言いってくれるロレアさんだけど、私も手が痛いたくなったんだから、彼女だ彼女ってきつとそう。

「よし、これはお礼おれいね!」

残残っていた布から、一組の布団ふとんが作れるぐらいの長さに切り取り、ロレアさんに渡わたす。

わざわざ布団ふとんにしなくても、シーツやカバーとして使うだけで、環境調節布かんきょうていせつふの効果は十分にあるし、きつと役に立つと思おもう。

「本当に良いんですか? こんなに綺麗な布、かなり高いと思おもうんですけど」

「気にしないで。ウチの店で売うっている物ならタダではあげられないけど、まだ売うってないしね。あ、その布、環境調節布かんきょうていせつふだから、私わたしみたいに寝具しんぐを作るのがオススメだよ」

「ええっ!? それって、更に高いですよね……」

「大丈夫、大丈夫。自分が使つかいたくて作っただけだし。お友達おともだちになった記念きねんだよ」

良いのかな? という表情あつぱを浮かべるロレアさんに、私はパタパタと手を振ふり、さらっとお友達あつぱ扱いあつかしてみる。いいよね?

「そう、ですか? ありがとございます」

嬉しそうにお礼を言うロレアさん。

よし、拒否されなかった。

嬉しそうなのは、布のおかげだと思うけど。

「あ、でも、それなら服を作っても快適なんじゃ？」

「んー、そこまで強い効果はないから、服に使うには微妙かな？ 無意味ではないけど」

環境魔力や寝ている人の身体から漏れるわずかな魔力を元に機能する布なので、そんな劇的な効果があるわけじゃないのだ。

でなければ、わざわざ綿を詰めた掛け布団を作ったりはしない。

もっと効果を高めた環境調節布も作れるけど、必要なコストは増えるし、魔力も多く消費するので、少なくともお布団として使うのはとてもお勧めできないんだよね。

寝ているのに魔力を消費して疲れるとか、本末転倒だし。

「なるほど、そうなんですネ。わかりました」

「しかし、結構綿を使っちゃったね。ロレアさん、まだ在庫ある？」

「はい、昨日買われたのと同じぐらいなら大丈夫ですよ」

「なら、近いうちにまた買いに行くね。クッションや座布団も作りたいし」

「は〜、さすがですね。私のお小遣いじゃ、とても綿なんて買えないのに……」

なんて感心したようにロレアさんが言うけど……いやいや、ちょっと待って？

「ロレアさん、私、成人してるからね？ 働いてるからね？」

いや、正確にはまだお店はオープンしてないけど、お手伝いレベルのロレアさんのお小遣いよりは、経済力あると思うよ？

「あ、そ、そうでした。なんか、同い年くらいに感じてしまっって」

「えっと、ロレアさんは今何歳？」

「今二三、もうすぐ一四になります！」

うぐっ。二つ下、だと……？

「そ、そうなんだ？ へえ、発育、良いんだね？」

「そうですか？ 友達の中では少し遅いかな、と思ってるんですけど」

無邪気に、悪気無くそんなことを言うロレアさん。

うん、そうだよ。解った。

この村と違って、同い年がたくさんいる王都で暮らしてたんだから。

私が他の人より、少しだけ成長が遅いこと。

大丈夫、まだ成長期だから——一年前とほとんど変化無いのは、きつと気のせい。

「サラサさんは？」

「私？ 私は一五だね」

「へー、そうなんですか」

「おや？ 今チラリと視線がどこかに向かなかったかな？ ロレアさん。」

もう少し露骨ろこだったら、敵認定ていて待ったなし——いやいや、この程度のことでお友達を失うわけにはいかない。

チラリと浮かんだ黒い感情を笑顔えがおで押し流し、私たちは日が沈しずむまで、年相応とくたいの益体えきたいもない話で盛り上がったのだった。

◇ ◇ ◇

次の日、減っていた布と綿が、なぜか元の量おおよそよりも大幅おほまに増えていた。

いや、まあ、別に不思議な現象が起きたわけでもなんでも無く、朝方、ロレアさんのお父さんがやってきて、新しい布と綿を大量に置いていっただけなんだけど。

昨日、ロレアさんが持ち帰った布を見て、商人である彼はその価値ちかひが判わからしたらしい。

『子供の手伝い半日程度でこんな高価な物は貰えない』と、半ば強引ごうぎんに布と綿を置いていったのだ。



確かに普通に販売したら、この布と綿よりも高いわけだけど、わざわざお手伝いに来てくれたお礼だから別に良かったんだけどね。

ちなみに、ロレアさんにあげた布は、親子三人のシーツになったらしい。とても寝心地が良かったとお礼を言われてしまった。

ま、せっかく貰ったんだし、この布はそのうち別の色に染めるとして。

まずは、お店のオープン。じゃないと、お金が底を突く。

「家の中はひとまず良いとして、今日は外の確認かな」

まずは屋根。

ここが傷んでいたら、家としては致命的なただけ……大丈夫みたい。

表面に葺いてある金属板を錬金術で強化していたみたいで、予想以上にしっかりとしている。これなら、当分は大丈夫かな？

ただ、お店の看板がかなり傷んでいるので、これはゲベルクさんに直してもらおう。

外壁も致命的な部分はないけど、軽い補修は必要そうだし、これも頼もう。

「問題は、この草ポウポウの庭、それに柵かな？」

ポロポロの柵は、無くても困らないので、撤去してしまう方法も……あ、ダメだ。

葉草畑を整備するなら、動物除けの柵は必要。

草は魔法で一気に処理してしまう方法もあるけど、幸か不幸か、葉草が交ざってるんだよね、この庭。それを無視して、全部刈り取る？

いや、無理でしょ。貧乏性の私には。

「……よし、やるべき事を整理しよう」

- ・ お店を開店する
- ・ お店で売る商品を作る
- ・ 柵をなんとかする
- ・ 庭と葉草畑をなんとかする
- ・ 井戸水を汲み上げやすいようにする
- ・ お風呂を稼働させる
- ・ 魔道コンロを作って料理ができるようにする

「短期から中期的には、こんなところかな？」

あとは、優先順位を決めないとなね。

と言っても、そう難しくは無い。

まず、お店を開店するを基準に考えると、商品を作るのはその前。売る物が無いとどうしようも無いから。

柵と庭も前かな？ 外見が悪いと、お客さんが来ないだろうし。

ついでに、庭の葉草使って商品を作れば良いよね。

残りは急ぐ必要が無いので、時間があるときに回せば良い。

「となれば、最初は柵か。商品作りは日が落ちてからでもできるし」

家の前の柵を軽く蹴ってみる。

ポコ、ベキ。

……うん、あつさり倒れた。これは完全に作り直しだね。

杭を打って横木を渡しただけの簡単な柵だから、大工さんに頼むほどじゃないかなあ？

資金節約のためにも、ここは自分でやるべき？

錬金術師は錬成具を作製する関係で、多少の木工はできるんだよね。

とはいえ、大工道具は持ってないんだけど。

学校では実習室を使っていたし、師匠の所ではお店の道具を借りていたから。

というわけで、やってきました雑貨屋です。

「こんにちは」

「あ、サラサさん、昨日はすみませんでした！ 帰って値段を聞いて、私……」

「あー、こつちこそごめんね？ お礼のつもりだったんだけど、気軽にあげるにはちょっと高かったみたいで。逆に私の方も布と綿を貰っちゃったし」

私の顔を見て、慌てたように言うロレアさんに、私は手をはたばたと振って応えた。

「いえ！ 是非貰ってください！ お父さん、あれでも釣り合わないって言ってました。

それくらい貰ってくれないと、逆に私たちがあの布を使いづらいので」

あー、うん、そういう部分はあるかもね。

特に今後、あの布をお店で売り出すとなると、半日のお手伝いで貰った、というのは双方にとつてあまり良くないか。

「それなら、ありがたく貰っておくね」

「ぜひぜひ。——ところで、今日は？」

「大工道具とか置いてるかな？ 一通り欲しいんだけど」

「あ、はい。普通の家庭で使う物ぐらいなら。良い物は直接ジズドさんに頼んだ方が良いでしょう。サラサさん、何かするんですか？」

「ちょっと柵を修理しようかと思ってね」

「えっ？ ご自分で、ですか？ ゲベルクお爺さんに頼まないんですか？」

ロレアさんは驚いたように言うけど、そこまで意外？  
柵を作る程度、簡単だよな？

「んー、あのくらいなら自分でもできるかなって」

「いえ、そうではなく。その時間の分、錬金術をする方が稼げませんか？」

「……おお。ロレアさん、賢い」

よくよく考えれば、ロレアさんの言うとおり、柵の修繕は人任せにして、早くお店を開いて錬金アイテムを販売した方が、たぶん稼げる。

孤児院時代から、とにかくお金を使わず、できる事は自分でやる、という精神だったので、まず自分で直すということを考えただけど、私はもう一人前の錬金術師なのだ。

そう、誰もがうらやむ、高給取りの錬金術師様。

それが私！

私、頑張った！ 人生、勝ち組！

……いやいや、落ち着け。

さすがにそこまで言うのはアレだけど、専門外は人を雇うというのも今後は必要になることだよな。その方が、錬金術関係に専念できるし？

「うん。そうだね。ゲベルクさんに頼んでみる事にする。でも、それはそれとして、大工道具自体は必要だから、それは買うね」

「はーい、まいどあり、です」

「ふむ、この柵か。あとは、壁と看板も大丈夫か？ 柵は今と同じ感じで良いのか？」

「えーっと、お店の前はそれで良いんですが、側面と裏側はせっつかくなので、二メートルぐらいの板塀にしてもらえますか？」

ゲベルクさんと共に家に戻った私は、早速色々注文を出していた。

「そりゃ構わんが、なんでじゃ？ 板塀はその分、高くなるぞ？」

「いえ、その、私も一応、女の子なので、洗濯物とか、あんまり見えない方が、ね？」

「はっ！ この田舎でそんなもん気にするヤツなんぞおらんわ。第一、隣の家とも離れとるじゃろうが。——まあ、客の注文なら作るがな！」

うん、まあ、確かに裏庭に洗濯物を干しても、あんまり見えないとは思う。

一番近いエルズさん宅ともそれなりに離れているし、周りには木が茂っている上に、裏はすぐ側まで森が迫っていて、見通し自体悪い。

それでもやっぱり、気分的に、ね。

あとは、葉草畑の保護。動物が入らないように。

逆に、お店の前はお客さんが入りやすいように、簡単な柵のまま。

そのあたりの希望も踏まえた結果、裏側と側面の中程までは膝の高さぐらいの石垣を作り、その上に板塀、それ以外の場所は開放感を重視した柵という構成に決まった。

看板や壁面に関してはよく解らないので、すべてお任せ。

その他の細かい部分もお任せ。

ゲベルクさんなら良い感じにしてくれるに違いない！

そう伝えたら、ゲベルクさんは「ふんっ」と鼻を鳴らして、「明日から工事を始めるからな」と言い置いて帰って行った。

「あれは……きつと照れたんだよね、うん。気を悪くはしてない……よね？」

少し気になるけど……今は時間が無い。

一日でベッドを作り上げるほど仕事が早いゲベルクさんだから、一気に工事が進みかない。そうなると、柵の周りにある小銭は無駄になる！

「回収しないと！」

家からカゴを持ってきて、柵沿いに生えている葉草をひたすら抜いていく。

「おっと、これは貴重なやつだ！」

摘んでしまうのは勿体ないので、根っこごと掘り上げて避けておく。

あとから植え直そう。

「草は放置で良いよね」

石垣を作るのなら、ある程度掘り返されるはず。わざわざ抜いておく必要も無い。

そのまま家の周りをぐるりと一周。

昼食と水分補給の時間以外は、夕方までひたすら草抜き。

ひじょーに疲れたけど、その甲斐もあって、荒れ放題だった庭は見られるレベルまで回復した上に、大量の葉草も回収できた。

「いやー、正直私、頑張りすぎじゃない？」

まだこれから、商品作りがあるんだけど。

今回回収した葉草はともかく、初日の葉草はそろそろ使わないと、効果が落ちてしまう。

一応、簡単な保存処理はしてるから、明日までならなんとかなりそうだけど、明日は明日で今日採取した物があるわけだし。

「ただ、貴重な葉草が多かったのは嬉しい誤算だったね！」

普通に買うと結構高い葉草が、何種類も生えていたんだよ。

もちろん、前の持ち主が植えていたからだろうけど、枯れずに残っていたことが凄い。

普通の薬草とは価値が違うから、当然全部回収して、きちんと耕した畑に植え直したよ。これでタダで作れる錬成薬の種類が、ぐーんと増える。

「良いよね、タダって言葉！」

「でも今は、少し休憩しよ。さすがに疲れた……」

私は家に入って軽く身体を拭くと、温かい食事を求めて食堂へと足を向けた。



翌日、いつもより少しだけ遅い時間に目を覚ますと、何やら家の前が騒がしかった。「んう〜ん？ 何だっけ？」

昨日の夜は結構遅かったので、頭がはつきりしない。

当初こそ、程々で切り上げる予定だった錬成薬作り。

それが、途中で薬瓶が足りなくなったあたりから、予定が狂い始めた。

薬瓶が無ければ作るしかないよね？

作るためにはガラス炉に火を入れないといけないよね？

そうなるともうダメ。一度ガラスを溶かしたら、使ってしまったないと色々面倒なのだ。

で、ひたすら薬瓶作り。冷えた端から錬成薬を注ぎ、密封。

それを繰り返し、最終的にガラスをすべて使い切る頃にはすでに外は白み始めていた。

おかげで商品は大量にできたんだけど……。

「あー、う〜ん？」

のそのそと身体を起こし、窓から外を覗くと……男の人がいっぱい。

……あ、そういえば今日から柵を作り始めるって言ってたっけ。

さすがゲベルクさん、思ってた以上に迅速だよ。

こんな朝早くから始めるとか……すでに資材が積み上げられてるし。

挨拶、しないといけないよね、やっぱり。

私は疲れた身体に鞭を打って起き上がると、身なりを整えて外に出る。

「おはようございます、ゲベルクさん」

「おう、おはよう、嬢ちゃん。庭、随分綺麗になったな？」

ゲベルクさんが示すのは、昨日頑張つて、荒れ果てた庭から、少し手入れを怠つた庭にクラスチェンジを果たしたウチの庭。

まだ草を抜いただけなので、さすがに、手入れの行き届いた庭にはほど遠いけど、随分マシになったのは確か。

「ええ、まあ、それなりに頑張りました」

「疲れているのはそれが原因か？」

「判りますか？ それも原因の一つですな」

身なりを整えたつもりだったけど、見て解る程度には疲れが表に出ているらしい。どつちかと言えば、寝不足の方が辛いんだけどね。

「それで、えっと、えっと、こちらの方たちは……？」

「こいつらは村の男衆だ。大規模な作業の時には呼んどる。問題ないと思うが、いらんちよつかいかけの奴がいたらワシに言え。根性、叩き直してやる」

そう言うゲベルクさんの右手にはどっかいハンマー。

それを軽々と、ブンブン振っている。

それじゃ、根性を叩き直すじゃなくて、叩きつぶすにならないかな？

ゲベルクさんの言葉に一部の人が顔を青くしたのは、たぶん気のせいじゃない。

「おはようございます、皆さん。先日引越してきた錬金術師のサラサです。よろしくお願ひします」

まだ挨拶していない人たちだったので、この機会に丁寧に頭を下げておこう。

私がそう言うと、皆さん、和やかに口々に挨拶を返してくれたんだけど……すみません、

名前は覚えられそうにありません。

「無理に覚える必要は無いぞ。自炊するなら、どうせ覚えることになる」

そんな私の困惑を察したのか、ゲベルクさんがフォローを入れてくれた。

どうやらここにいる人たちは、普段は農業をしている臨時雇いの人たちらしい。

つまり先日、エルズさんに案内を頼んだ時、後回しにしてしまった人たちってわけだね。

……うん、頑張って覚えよう。

「それで、作業はもう始めても良いのか？」

「はい、お願ひします。あつ、裏庭の畑には葉草が植えてあるので、そこだけは気をつけてください」

貴重な葉草をせっかく掘り上げて移植したのに、もしも踏まれたら結構悲しい。

「ワシはプロ、こいつらの本業は農家、解つとる。そいじゃお前たち、手はず通り頼むぞ！」

「『おう！』」

ゲベルクさんの号令に威勢の良い声で応え、男の人たちが動き出した。

見る見るうちにポロポロの柵が撤去されていく。

ゲベルクさんの方は家の壁や看板を確認しているので、手分けして作業を進めるのかな？

「あの、私は何かやることありますか？」

「ああ？ 細けえ注文がねえのなら、別に用事もねえな」

「そうですか？ それならお任せします」

すでにゲベルクさんにお任せしたのだ。

作業中にあれこれ言つて邪魔するつもりも無いし、何より眠い。

私は素直に部屋に戻ると、しばしの間二度寝を楽しみ、次に目覚めたのは完全に日が昇りきつて、昼間近という時間帯。

再びのそのそと起き出し、窓から外を覗けば、家の前の柵はすでに出来上がっていた。

「うわっ、さすがに仕事が早い……側面は……うん、さすがにまだだよね」

側面にある窓から覗けば、そちら側はさすがに石垣積みのみ真つ最中。

こつちまでできていたら、さすがに異常だよね。

「お昼は……適当で良いか」

食べに行くのも面倒だったので、買い置きの手し肉で朝食兼昼食を済ますと、「よしっ！」と一つ気合いを入れて、家の外へ。

「ゲベルクさん、お疲れ様です。順調ですね」

「おう、嬢ちゃん。そうだな、今日中に支柱を立てるところまでやって、明日の午前中に

板を張つて、門扉を作つて完成つてとこだな」

「早いですねえ。助かります」

「壁の方も直しておいたが、看板は数日待つてくれ」

ゲベルクさんに言われて家の方を見ると、何ヶ所かあった漆喰のひび割れが、確かに綺麗に塗り直されていた。

「——あ、本当だ。看板も了解です。よろしくお願いします」

「任せておけ！」

力強く請け合つてくれたゲベルクさんから離れ、私は辺りを見回す。

柵に関しては私が手伝うことは無いみたいなので、私は前庭を手入れの行き届いた庭にクラスチェンジできるよう、努力しようかな？

薬草は回収したから、あとは適当に木の剪定をして、草を刈り込んでから花壇でも作るう。

せっかくの自分のお店、どうせなら可愛いお店が良いじゃない？

花の綺麗な薬草を植えれば、一石二鳥だし。

とはいえ、花や葉っぱを使うタイプは花壇に植えるのには向かないから、花が終わったあとの根っこや種を使うタイプじゃないとダメだよな。

「まずは木の剪定から」

伸びすぎている部分をズバズバと切り落としていく……魔法で。

鋸は買ったけど、背の高くない私にとつて、高木の剪定はちよつと大変なのだ。

魔法だと細かいことはできないけど、木に登る必要も、踏み台を用意する必要も無い。草だって、魔法で刈っちゃうもんね！

普通の魔術師には難しい細かな制御も、錬金術師にかかれれば容易き事よ！

「ふっふっふ、便利だよー、魔法つて」

私の華麗な(?)魔法捌きに目を丸くする人たちを尻目に、私は作業を進めていく。

まあ、華麗かどうかは別にしても、こういう使い方にはかなりの制御力が必要になるから、できる人は限られていることは確か。

だからこそ、錬金術師はエリートで数が少ないのだ。

「花壇は……アプローチの脇と、家の壁際で良いかな?」

位置を決めたらザクザクと土を掘り返し、裏の森から切り出した丸太で境を作る。

一応、ゲベルクさんに確認して、木を切っても問題ないというお墨付きはもらっている。その際、丸太を担いで戻ってきた私に、男の人たちから驚愕の視線が注がれたんだけど、これ、身体強化してますからね?」

あえて主張はしないけど、素じゃかなりひ弱ですから、私。

「よし、できた〜〜!」

剪定された植木と綺麗に刈り揃えられた草、野趣溢れる——素朴な感じの花壇。

これはもう、手入れの行き届いた庭」と言っても良いんじゃないかな?」

「あとは……花壇、何を植えよう……?」

手持ちの素材の中で、花が綺麗な薬草を思い浮かべる。

どの薬草も花は案外綺麗なのだが、手元にあるのは種自体が素材になる物のみ。

私がつ持っているのは飽くまで錬金術の素材。葉っぱを使う薬草は葉っぱしか持つてないし、根っこを使う薬草も乾燥させた根っこなので、植えたところで芽は出ない。

「時期は良いから、大抵の物は大丈夫なはずだけど……」

幸い、今は春。播く時期としてはちょうど良いし、種を使う薬草なら、花が終わるまで花壇に植えておけるので、観賞用としても悪くない。

葉っぱや花を使う薬草だと、途中で萎ってしまう事になるので、台無しだもんね。

私はしばらく考えて、アプローチ脇には小さくて白い可愛い花が咲く薬草、家の前には青紫の少し大きめの花が咲く薬草を植えた。

「こっちは芽を伸ばすから、芽が出るまでに支柱も準備しないとね」

どちらも強い葉草なので、芽が出ないということは無いと思う。  
花に囲まれて営業する自分のお店を夢想して、私は一人笑みを浮かべた。

続きは、9月20日発売のファンタジア文庫で！

©Mizuho Itsuki, fumi 2019